



JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都渋谷区広尾1-10-4

越山LKビル内 TEL 150

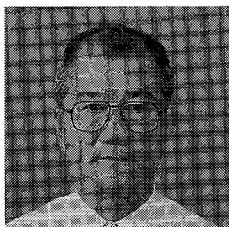
TELEPHONE 03-5420-5995

FACSIMILE 03-5420-5996

第5期定例総会開かる

活動の活発化から 独自性の模索

大塚 守康
MORIYASU OTSUKA
代表幹事
(株)ヘッズ



■7月15日(土)、天王洲アイルにおいて、都市環境デザイン会議第5期定例総会が開催された。出席者は開会時43名、閉会時には52名となり、委任状125名と合わせて総数177名であった。総会後には恒例となったモニターメッセ及び懇親会が催され、いずれも盛大、成功裡に終わった。モニターメッセには20社の企業の参加を得たが、時折柄、企業の招請に事業委員長の西澤健氏は大分御苦労された。しかし、すでにベテランとなった企業の発表内容はかなり水準の高いものであった。

開会は南條道昌代表幹事の挨拶で始まり、氏はバブル崩壊後のこの時こそ「心」をもったデザインを、と述べられ、市民との会話や委員会、出版活動を積極的にと加えられた。議長には関西ブロックの井口勝文氏が選出された。

■総会第1号議案として、第4期活動報告及び収支報告がされた。総括として倉田直道代表幹事は、委員会、ブロック活動が積極的に展開されるなかで、会の主体性や独自性が模索されていること、国際委員会が創設され、外部への情報発信を意図した活動が検討され、具体的な取り組みも行われ始めていること、依然として財政基盤の強化が必要であり、一部のブロック活動には活性化支援の必要が感じられる等の活動概要を報告した。

委員会活動報告及び収支報告においては、各委員長からの報告があった。広報・出版委員長の土田旭氏は、JUDI NEWS発行の報告、イヤーブック、デザイン年鑑発刊の準備情況を述べた。研究・研修委員長の篠原修氏に代わり岸井隆幸氏は、会員向け・学生向けセミナー開催を報告し、盛会であったにもかかわらず、会員の参加が少なかったと述べた。また、最近行われた自治体職員向けの講習会では、大きな成果が得られたとのことであった。事業委員長の西澤健氏は、引き続いで行われるモニターメッセの準備段階の情況と、都市環境デザインガイドマップの発刊準備について報告された。国際委員会からは長島孝一委員長に代わり、加藤源氏が第1回JUDI国際セミナー開催の様子を報告された。そこにおいても、会員の参加が意外に少なかったとのことであった。

025 JULY 20.
1995

発行者

都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

北陸ブロック	15
中部ブロック	
白川郷の明日を語るJUDI!	
あすまちセッション白川村Part 1	16
関西ブロック	18
四国ブロック	18
九州ブロック	
佐賀の風土と環境デザイン開催される	18
●私の本棚	19
●事務局より	20
●編集後記	20

続いて、ブロック活動報告及び収支報告においては、各ブロックから次の事項が報告された。

北海道ブロックからは、矢島建ブロック幹事に代わり、柳田良造氏から、2月に盛大に行われた小樽における全国ブロック幹事会及びデザインフォーラムの様子が報告された。

東北ブロックからは、山崎洋二ブロック幹事が、「杜の都デザイン会議仙台」の参加活動と、活性化のためにブロック活動のコアスタッフを設置したことを報告された。

北陸ブロックからは、水野一郎ブロック幹事に代わり、坂田守正氏が、「都市環境デザイン会議in福井」についてと、情報通信誌「北陸DOCUMENT」の創刊を伝えた。

関東ブロックの伊藤洋ブロック幹事は、7回におよぶブロックレターの発行と、継続的追求テーマとして、福祉、歴史環境、デザイン監理に視点を据えた活動を行っていると語られた。

中部ブロックからは玉木伸秀ブロック幹事より、「国際パブリックデザインフェアNAGOYA'94」への参加、例会としての名港三大橋海上見学会、「JUDIあすまちセッション白川村」の開催情况と、あすまちセッション小冊子発行が報告された。

関西ブロックの江川直樹ブロック幹事は、月1回開催される都市環境デザインセミナーと、その成果として発刊された「都市環境デザイン、13人が語る理論と実践」を報告し、500人を集めて盛大に行われた第3回フォーラム関西の様子を話された。

中国ブロックの金谷啓紀ブロック幹事からは、例会2回の開催と、四国ブロックとの交流が報告された。

四国ブロックからは、林茂樹ブロック幹事が、「JUDI NEWS四国」2~4号の発刊と、シンポジウム「ベイサイド・トーク」開催について報告した。

九州ブロックの岡道也ブロック幹事が、九州ブロック連絡協議会の開催によるブロック内活動の活性化と、見学会、シンポジウムの開催の報告をされた。

■第2号議案として、第5期活動計画及び予算計画が諮られた。そこにおいて、倉田直道代表幹事は活動方針として、「基本的な活動を超えて、対社会的情報発信、交流活動の活性化」、「JUDIの特色を活かした独自性の模索」、「運営体制、財政基盤の強化」、「交流、親睦の輪を広げる活動をブロック活動に重点を置いて」と述べられた。

各委員会からは、「都市環境デザイン1985-1995の発行、各委員会、ブロック間における出版等の情報の一元化（広報出版委員会）、会員向け・学生向け都市環境デザインセミナーの実施、自治体職員向け講習会の継続（研究・研修委員会）、モニターメッセ及び講師派遣の継続、都市環境デザインガイドブック等の出版業務の準備（事業委員会）、国際セミナー、講演会の開催（国際委員会）、等が報告された。

各ブロック活動においてはますます活性化、活性化される中で、継続される活動の他に、次のような具体的な活動予定が報告された。「'95 プランニング塾の開催」（東北ブロック）、「都市環境デザイン会議in新潟の開催」（北陸ブロック）、「JUDIあすまちセッション2ndの開催」（中部ブロック）、「震災復興を意識したフォーラムの開催」（関西ブロック）、「全国ブロック幹事会とフォーラムの開催」（四国ブロック）、「九州都市環境デザインガイドマップの出版企画」（九州ブロック）。

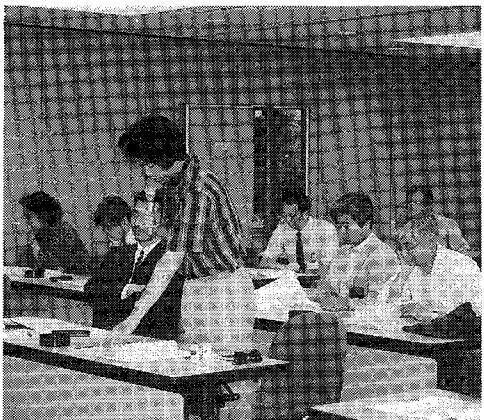
以上の活動予定は順次JUDI NEWSで報告される

ので、御注目いただきたい。

■引き続き自由討議においては、本会の当面の大きな出版事業であるデザイン年鑑とガイドブックについての準備情况の他に、阪神淡路大震災の支援活動について、井口勝文氏、江川直樹氏から情況報告があった。そこにおいて両氏は、現実の問題としての支援活動が、「官民の間にあって非常に難問であること、その中で、JUDIとしては一元化されていない復興プロジェクトの横の連絡が重要であり、特に現状復興に留らない都市のアイデンティティの検討が必要である」と語られた。

■本会議はますます充実をみており、ブロック活動の活性化には目を見張る情勢にある。会員数も昨年の総会時に比べ55人増え、457人（'95.5.31）となつた。500人の大台も間近である。しかし、協力法人は時勢を反映してか、5社減の57団体となつた。このあたりからも、活動の活性化に対して財政の問題が残る原因となっている。会員各位の御協力を切にお願いしたい。

また、ブロック内事業に比べて本部事業への会員参加がもうひとつ思わしくない。特に定期総会は昨年に比べて参加者が伸びたとはいえ、いま一歩である。本会の総会は、一般的な型通りのものと違って、会そのものの活動を反映する内容で非常に興味深い。次回には多数の会員の自主的な参加をお願いする。



特集

都市デザイン・ 地域デザイン

都市環境デザインは、次のうちどれであろう？

- 都市的な環境のデザイン

- 都市地域の環境デザイン

- 人工物を含む地域環境のデザイン

あるいは

- 農村環境デザイン

- 自然地における観光施設や土木施設のデザイン

は含まれないのか？

はたまた特定の施設や場所の環境整備だけではなく、

- 都市そのもののデザイン

- 背景にある土地利用

- 地域景観

などの分野も対象と考えてよいのか？

以上のような都市環境デザインの分野および範囲に関し、疑問を感じる場面が少なくない。特に地方都市において、狭義の“都市環境デザイン”の出番は多くない。つまり本当は都市環境デザインではなく、地域環境デザインではないだろうか。都市的な環境デザインは、地域デザインにおける一つのローカリティ（地域性・場所性）の表現ということができる。

これらのことと環境デザインにおける地域性、あるいは場所性といったことをもう一度考えてみたい。これはおそらくこれからの都市デザインの課題でもあり、都市の背後の広大な地域の課題でもある。

都市のデザインと 地域のデザイン

土田 旭
AKIRA TSUCHIDA
広報・出版委員長
(株)都市環境研究所



■都市デザインの多様なカテゴリー

都市デザインという言葉は、環境デザイン、パブリックデザイン、シビックデザインなどという類語も含めて、少なくともデザイン専門家の間では市民権を得つつある。われわれの会議では諸事情を考慮して、都市環境デザインという用語を採用しているが、これも含めていずれ適切な用語に収斂していくだろう。いまここでは上のような事情を承知した上で、総体として「都市デザイン」を用いらせてもらう。

一方、行政においてもデザインという言葉が、かってみられたほどの違和感はなしに迎えられつつある。今から10年ほど前まではデザインという言葉に主觀性や必要以上に創造性を感じて、行政内部で用いるのにためらいがあった。一つには例えば「都市デザイン」を早くから標榜し、この方面での先進的都市である横浜市の成果を見聞きするなか、そこまではやれないというコンプレックスがあったかも知れない。

上に触れた以外にも「都市デザイン」の類語としてタウンデザイン、まちなみデザイン、都市デザインを包含する概念と一部で主張されるランドスケープデザイン等々がある。これは、よってたつデザイン分野が各々の立場を基礎にしつつ都市空間におけるデザイン的貢献を主張するところから生まれていると考えられるが、一方で都市デザインという言葉自体各行政や各個人がとらえている内容も千差万別である。

きわめて楽観的に、アバウトにいえば、社会的に定着しはじめた一つの兆候とみることができるし、多少の危惧をもっていえば、都市がさまざまなデザインビジネスの場になってきて、各々の立場から総論的に環境的調和が主張されつつも、各論的には喰い散らかされる心配が増したことができる。しかし景観や都市デザインに対する関心の持続性から判断して、現在を過渡的段階とみる方が正しいだろう。各デザイン分野におけるデザイン対象の性質、デザインの目的ないし意図、タイムスパン等々の違いをこえて、コ・ワークでより良い環境を創りだす一層の努力が必要であり、各分野デザインが環境を相対的にとらえる中で各デザインを展開することになれば、都市あるいは環境デザインなる概念は今日ほど強調する必要はなくなるだろう。そして「環境行政」という概念も不要、ないし今とは違った意味合いをもつたものになるだろう。

■「都市景観形成」と「都市デザイン」

今からほぼ10年前、建設省が景観行政を推進して以来、「都市景観形成」という用語が行政に定着した。そしていま、「都市デザイン」「都市美デザイン」等を用いる地方公共団体が、数はまだ少ないものの増えてきている。これは何を意味しているのだろうか。一つには都市景観形成といいい方よりも具体的なデザイン事業を展開していく上で「都市デザイン」を選択させていると思われる。

各行政において、60年代後半から歴史的まちなみの保全、風致や緑地の保全、うるおい(アメニティ)のあるまちづくり、美しいまちづくり等の施策が展開してきた。これらは総じて「環境」

や「景観」の「保存」や「保全」を指向するものであった。「修景」という行為は意識されていたが、空間を「創る」という意識はそれほど強くなかったといってよい。しかし近年になって歴史的まちなみ保存にしても「創る」部分が少くないことに気づき、景観行政全般の中でもこうした認識が強まっていることが指摘できよう。もう一つには、「都市デザイン」といった方が、何を手がけているかより直接的であるし、新しい行政展開をしているというイメージがある。また、このような新しい概念の方が、それまでの行政分担にとらわれることなく巾広く対応できることを発見した、ということもありそうである。都市デザインを標榜している市町村でのその内容を見ると、企画サイドの文化事業の一環としてとらえていたり、建設行政においても単に「デザイン」事業だけでなく地区計画や、街なみ保存、住民参加型事業などかなり広範囲を扱っていることが分る。

しかしながら、「都市景観形成」も「都市デザイン」も行っている内容は依然として公共空間の修景的なデザインが多い。都市デザインとは元来、都市を設計するの意であり創造的な都市計画(まちづくり)と同義といつてもよいが、そのほんの部分である修景的デザインが、今日一般に「都市デザイン」と理解されているにとどまる。行政内の役割分担からみればそうならざるを得ないのは分らないでもないが、とすれば、道路や河川、公園や建築そのものの事業の中に都市デザインの感覚を取り込んでいく必要がある。

さて、本論に戻ると、都市デザインがまちづくりでいかに大切かを主張し運動し始めた矢先に水をさすことになりかねないが、「都市デザイン」という用語を安易に用いることで、景観という概念に含まれるより広いパースペクティブが失われることを恐れる。景観は、良い景観も悪い景観も、すでにあるものも新しく創られるものも全て含んでいる。空間のみならず、時間や人間の営為をとり込んだ包括的な概念である。行政用語としての都市景観からもいったん離れ、より広い観点から都市デザインを推進していく上で、このことを心しなければならないだろう。そして、都市の、地域の景観を再度虚心に見ていくことが必要ではないだろうか。

■都市景観から地域景観へ

景観を都市景観中心に見、その中でのみ「都市デザイン」を追求することが偏っていることではないか、という点に関しては、大都市地域の市街地から外れて、例えば地方都市を見れば一目瞭然である。ここで都市の景観を見ると、自然地域や農村地域を含む地域の景観構造に規定されてくる部分が少なくない。すなわち盆地の町とか川沿いの町は地形によって町や集落の空間構造を規定されているし、また、地域の農林漁業が地域の景観を特徴づけており、そこにおける町や集落の景観と切り離せない。かって舟運や街道筋といった交通の要衝にあって形成された町も、ゆるやかな都市化のテンポの中で、昔の空間構造を残している。比較的規模の大きい旧城下町などの都市も、当時の軍事的要請からその立地を巧みに選んでいる。

景観をみると、都市をこえてより大きい地域の空間構造をとらえることで、今日においても、その場所のもつ空間価値を再評価することができる

のである。

ところで都市（まち）の景観構造を規定する自然地域や田園地域の景観も、今日、きわめて不安定な状態にある。この地域の景観は、多くの人びとにあってふるさとの風景であり、また日本人にとっての原風景としてイメージされている。たしかに、都市に較べればよほど良い景観を維持しているが、必ずしも安定した状態で今日あるとは思えない。ことに都市地域と比較的近い農業地域は、都市とも農村ともつかず中途半端な風景を呈している。地方の農村地帯でも、ビニールハウスや工場の景観と見紛う農業用のプラント、倉庫など、農業生産の近代化によって農耕風景や農村あるいは農家住宅自体大きく変貌しているが、こうした施設にとどまらず、田園風景と環境を維持してきた農地利用が農業政策の不定見によって土地利用的に混乱する恐れがある。かつて（1960年代に）、良き伝統的集落や町なみの風景が、近代化というよりも工業製品の氾濫、近代化と称する工法等によって崩れ、今では古都法や伝統的建造物群保存地区等ごく限られた範囲にしか歴史的まちなみがみられなくなったのと同様に、近い将来、伝統的農業（田園）景観保全地区といった概念が現実化しないとはいきれない。事実、石川県では千枚田（棚田）を史跡とたし、風景条例を検討中の県もあると聞く。このような都市をとりまく地域の景観についても、発言していく必要があろう。

■地域性と場所性

ところで、建設省の設置した美しいまちづくり懇談会は1994年（平成6年）に提言を行ったが、その中に以下のような文言がある。

3-3 地域らしさの実現

諸外国の知恵を、その背景を理解しつつ深いレベルで取り入れながら、歴史、文化、風土などの地域の特性を引きだし、生かすまちづくりを主体的に進めるべきである。

—— わが国の変化に富んだ地形や豊かな自然、きめ細やかな歴史・文化・風土はすばらしい資源であり、国土のいづれの地域においても底流としてそれを感じることができる。

—— （しかしながら・・・）特に先進国に成長していく過程のまちづくりで、地域の個性の没却、まちの姿の画一化が進み、さらに今日では、内外の多くの情報入手が可能となった結果、・・・必然性に乏しいまま安易に流行を負うこと指向しがちになっている。自然、風土、市場商品などの地域資源を活用し地域の具体的ニーズに即したまちづくりを考えるべきである。地域の景観をみつつ地域のデザインをめざすとき、必ず地域特性をどう表現するかという課題が浮上する。地域特性すなわち地域性、さらにいえば地域主義と直接的につながっているとはいえないが、この問題についても視野に入れておくべきだろう。

かつて建築デザインの世界で、インターナショナリズムとリージョナリズムないしローカリズム

をめぐって議論があった。あるいはバナキュラリズムといつてもよい。しかし現在ではこの議論は下火になっている。建築デザイン界では、時代時代で間欠的に出るデザインテーマなのかもしれない。

都市計画にも同様の局面があった。20世紀に入って、ことに第2次大戦後の工業化社会で、思想的ないし概念的にはインターナショナリズムに強く影響された。わが国でも、戦後の戦災復興計画の諸提案や経済の高度成長期には同様の傾向があった。地域よりも理念ないし技術の普遍性（機械的適用）が、個別よりも大量生産と供給が優先された。都市計画はまた、土地との深い関わりをもつと同時に、制度的側面からも国家という「地域」から切り離して論することはできない。もっとも、全国を一律におさめようとする官僚主義が強かった50年代～60年代は必ずしも地域性を意識していなかったし、現在になっても必ずしも地域性重視が一般化していたとはいえない。だが、先の提言に示されるように確実にその指向は強まっている。

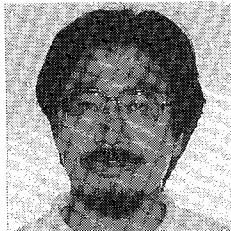
一方、社会的、経済的にはボーダーレス化は進行している。かつて江戸時代の幕藩体制はわが国の各地域のアイデンティティを形成し、今でも色濃くその名残を残しているが、わが国で地域性はこれとオーバーラップするところが多い。地域の素材、伝統的工法、さらには地域文化によって生みだされた地方建築と、その集合である集落やまちなみは、こうした各地域の歴史的プロセスの上にあるもので、今日の地域概念と必ずしも一致しない。すでに存続しているものを「保存」し「保全」することは十二分な意義を持つが、これを様式として安易にとらえ、「創造」（デザイン化）する傾向にたいしては注意深くありたい。

近年、建築や都市デザインで、地域性、風土性の主張よりも場所性の主張が強調されているように見受けるのも、地域性という言葉の意味するものが個人の創造性を束縛する印象のあるリージョナリズムとかバナキュラリズムに引きずられるのを嫌うというのが一方にあり、また、とくに都市において全国共通の様相の方が強くなっている現在、地域性よりも場所性といった方が適切と考えているということがありそうである。場所性というときには、全体との脈絡を切る、切りたいとする意向が働いていることに気づく。いずれにせよそこには、地域性や風土性を必要以上に意識することなく、個人の人格にもとづく創造活動が新しい都市空間を創っていく上で大切であり、その結果が地域の表現になるという考え方がある。

しかしながら、場所の感覚を生みだすのは、土地や気象といった自然条件、そこからもたらされる产物や生活様式、地域の発展過程における場所の空間構造上の位置づけや機能、周辺環境等々の特性であり、都市の部分を対象にするときとか、設計的行為にのみ場所性を限定してとらえることは必ずしも適切でない。都市のデザインあるいは地域のデザインは、これら地域（特）性とどのように向い合いつつ、新しい空間価値を創出するかということが課題なのであり、その集合が都市や地域の景観を形づくっていく。

都市デザインにおける地域性について

石崎 均
HITOSHI ISHIZAKI
(株)地域環境デザイン



都市デザインと言っても、その範囲や分野は多様であるが、ここでは、地方都市の中心商店街の都市デザインについて取り上げてみたい。

近年は、郊外部における大規模ショッピングセンターやロードサイドショップの進出により、まちの中心であった既存商店街の地盤沈下が著しく、その再生計画の一環として、箱物としての再開発事業やイベント等のソフト方策と並んで、商店街の街並み整備が計画されることが多い。このような計画においては、ドイツ風街並みやスペイン風街並みなど、その都市の歴史や地域性にまったく無縁なデザインテーマが安易に提案される例も見られる。このような街並みは、完成当初はその話題性によって消費者を引き寄せるパワーを一時的に持つものの、地域の歴史風土に無関係な根無し草的存在であり、その陳腐化のスピードも早い。しかし、このような傾向は、なにも街並みを提案した建築家やコンサルタントが専ら責任を負うものではなく、我が国の戦後の文化的性向が招いたものであり、その根は深いものがある。

コンサルタントが街並み整備のテーマを求められるとき、当商店街に歴史と呼べるほどの年輪がないか、古くからの商店街であっても伝統的な建築様式（いわゆる町家建築等）を残している店舗が失われてしまっている状態がほとんどであり、地域の歴史文化を体現する伝統的な建築様式の採用は、極めてアリティに欠けるのが地方都市の商店街の現実である。したがって、ついついイメージの明確な外国の建築様式やスタイルに縋らざるを得ないというところが実態なのである。

このような商店街における伝統的な建築様式や街並みの消滅は、日本を代表する歴史的都市においても進行していく恐れがある。筆者は現在、高山市を中心とした商店街の活性化事業のお手伝いをしているが、全国的に有名な伝統的建造物群保存地区の三町筋が観光スポットとして多くの観光客を集めているのに対して、地域住民の消費サービスの中心である中心商店街では、郊外店や駅西の新たな商業開発等によって、その地位が脅かされつつあり、その中心的地位の維持、強化のために、通りのリニューアル（アーケードの架け替えと道路の高質整備、街並み協定の締結等）を進めようとしている最中である。デザインの中身を地元商店街と協議するなかで、三町筋への対抗心も混じって、高山の伝統色を払拭したモダンなデザイン的表現を求める地元意見が一部に強く見られた。大都市圏に拠点を構える者（＝計画者）と地元住民との伝統的価値に対する評価の逆転現象であり、一般的に良く見られる傾向である。

このような伝統的様式の軽視や反発は、戦後以降、今まで一貫して続けてきたアメリカナイズされた生活様式の追求や価値観からもたらされる部分が大きい。アメリカ的価値観とは、市場原理を最優先し、公平な競争条件を前提にして、自由な経済社会の実現を目指すものである。現在、喧しい「規制緩和」や「消費者至上主義」も、このような考え方に基づく。一見、普遍的な考え方には聞こえるが、実は歴史の浅い多国籍国家を統合していくための極めてアメリカ的な理念であり、同

じ先進資本主義国家である西ヨーロッパは、これほどシンプルではない。

生活共同体としての古い歴史を有するヨーロッパの都市では、資本主義経済が本質的に持つユーバーサルな経済空間を指向するベクトルと、歴史や文化を共有する一定の限定された空間としての地域性を指向するベクトルとが拮抗している。市場原理の貫徹は、観念的な経済空間では最も効率的な富の配分をもたらすかもしれないが、実際の場では、都市や人間の歴史・文化を平準化し、極めて味気のない生活空間を生み出していくだろうし、同様に人間の一面に過ぎない「消費者」至上主義は、生産者としての面を持つ同じ人間を価格破壊を通じて経済的な苦境に追い込む。ヨーロッパにおいては生産、流通、消費を担う統合的な人格としての「生活者」同士の共生を目指し、そのためには、多少の不便や非効率性、或いは非利益を甘受しようという基本的考え方がある。生活共同体としての古い都市の歴史が培ってきた「知恵」であり、アメリカの分かりやすいが、極めて過酷な面を持つ「観念」的社会とは、この点において大きく違っている。

当然、このような価値観の違いは、現代の富の集積地であり、価値観の鏡である都市や商業地の形態やデザインに影響を及ぼす。アメリカにおいては、野放図なモータリゼーション社会と「消費者」に媚びた遊園地的な郊外型大規模ショッピングセンターが主流であり、そのあたりを受けて、多少とも都市文化を培ってきた中心市街地の歴史的な商店街が衰退に向かっている（モールオブアメリカによって寂れつつあるミネアポリスのニコレットモールを見よ）。一方、ヨーロッパでは、商業地は人の住む空間であり、人の歴史が刻まれる人生の舞台である。伝統的な建築様式へのこだわりも、個々の店舗の自己表現への欲求より、大きな歴史的文脈を尊重し、地域の中で共に生きようとする姿勢の証を優先させようとする哲学や知恵のあらわれである。

一方、我が国を振り返って見ると、ヨーロッパに劣らない歴史文化の集積を持ちながら、アメリカンライクスタイルの盲目的な追随が主流となってしまい、更に悪いことに、アメリカのような国家理念に裏付けられたものではなく、理念なき経済至上主義が、生活行動の基調をなしている。このような国民の価値観や生活様式から帰結されるのは、先進国の中で最も醜いバイバス道路景観であり、伝統的な町家建築の消滅であり、更に中心市街地の空洞化であることは充分に領ける。そこでは、都市は歴史・文化の蓄積装置としての機能等、多様な機能が剥がされ、単なる物流装置として一元的に捉えられており、更に都市そのものが、商品に成り下がり、消耗すれば（飽きられれば）打ち棄てられる時代になっている。

このような我が国の状況を見ると、地域性豊かな魅力的な中心商業地の街並みづくりも、それを支持し、育てる地域住民そして地域商業者自身の価値観の転換（市場原理から共生原理へ、消費者至上主義からコミュニティ重視主義へ、経済のボーダレス化から地域経済循環やアウタルキーへの

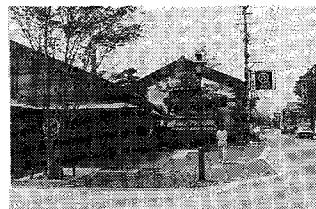
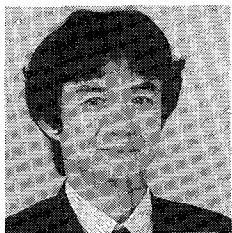
地域の活性化と 環境デザイン

伊藤 光造

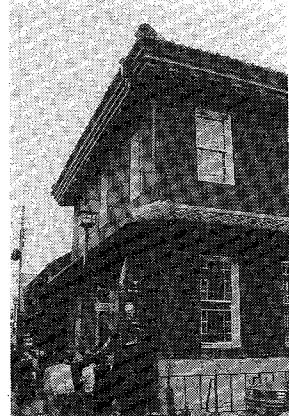
KOZO ITO

広報・出版委員

(株)地域まちづくり研究所



小布施町：町の中心部で県道に面している



黒壁一号館：ガラスをテーマとした再活用



33番池ふれアイランド：会のメンバーによる作業が進む

シフトへ等)が進まないかぎり、コンサルタントや建築家の一方的な提案に終わってしまうことに間違いない。都市デザインは、都市住民のライフスタイルや価値観の自画像であり、歴史文化に裏

付けられた魅力的な都市デザインの実現には、今後の高齢社会の到来や、地球環境問題等への対応と同様に、都市の暮らし方の哲学そのものが問われるるのである。

関係のデザイン

地域における環境デザインの現場では、地域社会の活性化と環境デザインが結びついている場合が多い。この場合の活性化とは、経済的な意味で新たな活動を喚起すること、人的な交流を盛んにすることなどであるが、地域住民が親しみや誇りなどを感じるなど個人の心情レベルの場合も含んで良い。具体的な場面としては、商店街の環境デザイン、駅前やコミュニティ広場の環境デザイン、地域の親水空間のデザインなど様々である。

しかしいずれも地域社会の何らかの活動と関係する場所のデザインであるため、当然意匠レベルの検討とあわせ、そこにどのような機能や利用状態を想定するか、維持管理をどうするかなどの検討が重要である。さらに、行政、企業、個人など単一の主体の判断のもとに進めるのではなく、複合的な主体の関与を想定し、デザインをまとめるというプロセスも伴う。もちろんそれらの設置場所、整備する施設の分野によって、関係する法律等様々な制約条件を背負っている場合が多い。

これらを調整しつつ、最終的には一つの形に落とし込み、あらたな空間あるいは環境を創り出すプロセスを、環境デザインとすると、環境デザインの多くの部分は、実は“関係のデザイン”といいうことができる。実際地域においてそれまで無かった画期的な空間は、新しい“関係”を創り出した（デザインした）結果だといえる場合が多い。

旧市街地の再生：場のデザイン

近年まちづくりシーンで注目を集めた、長野県小布施町（株）黒壁による北国街道沿道のガラスをテーマとしたまちづくりなどは、まさに関係のデザインに成功し、地域に対し画期的な効果をもたらしている好例といえよう。

例えば小布施町では、栗菓子店と銀行と記念館と住宅、これらを結ぶ広場兼駐車場等が造られている。関連する建物はほぼ新築であるが、歴史的雰囲気に沿った意匠となっている。また例えば（株）黒壁であるが、民間主導型の第3セクターが主体となり、明治中期に建てられた木造2階建、黒漆喰塗の銀行の建物を取得し、その後次々に町家などを活用し今や18店舗でガラスをテーマとした町づくりを現実化している。

それぞれ地域の歴史に根ざしつつ、新しい文化を持ち込み、独特の新たな活動を生みだしている。また歴史的雰囲気を活かしつつ、新しい空間を創り出している。それが驚くほど集客効果をもち、小布施では地域のなかで別の場所にも飛火して活動が広がっている。（株）黒壁では、平成7年度の総入店者数は約百万人と見込まれている。

この2例は、いずれもいろいろな観点からみて

水準が高く、目配りも行き届いていて、まちづくりとしては相当高度な“あわせ技”となっている。いわば“D難度”でしかも鮮やかにキメており、地域における環境デザインの限りない可能性を見せてくれている。ある種の新しいエネルギーを継続的に生みだす“場”が創り出されている。つまり“場のデザイン”が行われているといえる。

また小布施町は（株）黒壁が事業主体となっている。それぞれがいわば“まちづくり法人”といって良い、新しいタイプの主体による事業である点も、新しい“場”的創出という観点で興味深いことである。

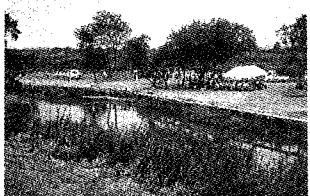
コミュニティの活性化：活動のデザイン

居住環境に関しては、静岡県磐田市岩田地区における、“33番池ふれあいランド”的例を紹介しよう。これは地元住民によるボランタリーオーガニゼーションである、“住みよい岩田をつくる会”がつくった手作り公園である。その活動は地元でも大変に評価が高く既に幾つか表彰を受けているが、とうとう本年3月自治大臣表彰を受けるに至ったという例である。

地区のはづれにあって、ゴミ捨て場に近い状態になっていた池とそのまわりのアシだらけの空き地（民地）約5千m²を、住民の手で、地域住民のための憩いの広場、子どもの遊び場として整備したものである。もちろん土地は、会が、地主の理解を得て10年間無償借用することになった。実際にどういう公園とするかは、筆者らの提案で、子どもも参加するワークショップ方式で行い、計画をまとめた。整備は、会のメンバーが総出でしかも5年間かけて着実に行ってきました。この間市では年百万円、計5百万円を助成している。

出来上がった公園には、池の回りの木道、岩田富士（築山）、広場、水遊びコーナー、花壇などがある。施設内容は素朴であり、環境デザインの“形”として見るべき点は多くないが、それでも池の自然環境を大切にする意味で、水際に木道を設置し水辺環境保護に配慮している点、コンクリートなど人工的な構造物が少なく木を活かしていることなど、これから公園のありかたを示唆するところが少なくない。また維持管理も“会”で行っており、時々であるが、子供達を対象とした遊びの会を開催するなどのことを行われている。また会では、既に第2弾として耕作放棄地を利用し虫の里づくりを行い、また第3弾として、現存する旧村役場の建物を活用し、地区の資料館等としようと目論んでいる、と聞く。

空き地を見事に蘇らせ、新たに住民に親しまれる場が創りだされ、更に第2、3弾も進行している。“住みよい磐田をつくる会”も新しいスタイルのまちづくりの担い手である。会が実行し創り



33番池ふれアイランド：広場・木道が完成している

出している結果としての“場”も大切であるが、どうも“会”的存在自体も新たなコミュニティ活動として非常に重要である。これらはむしろ“活動のデザイン”といえる。

地域社会のデザイン

前述の3例は、ごく限られたケースではあるが、これらを見るだけでも、地域の環境デザインを考える大きな示唆を与えられる。

ひとつは、仮に特定の場所や施設のデザインであったとしても、当然それを通じて地域社会そのものを洞察することが必要となる。その過程で“関係のデザイン”を行うことになる。この場合“形のデザイン”はストーリーでいえば、結論にあたる部分となる。

また“デザイナー”的役割に関しても、考えさせられることが多い。地域のなかで特定の場所をデザインをする場合、整備主体、土地所有者、整備資金支出者、管理者、利用者等多くの主体が関係する。その中で1つの有意義な結論を見出していく作業が発生する。これはデザイナーの仕事なのか否か…？

あるいは物が出来上がるまでのプロセスもある。用地交渉、コンセプトづくり、基本計画、財源確保、実施設計、工事施工、維持管理といった段階にどのように係わり、どの様な提案をするか。

個人的に言えば、環境デザインは、できるだけ幅広く、奥深く考えるべきものであると思う。デ

ザイナーもその時々により広狭・深浅、色々なポジションが与えられるであろう。その際なるべく広く深く係わること、を狙いとすべきである。しかしどんな場合も結論としてカッコ良いものが創り出されなければならない。奥深く、幅広く係わるほど選択肢が増え、面白さは増す。しかし同時に読み込む変数が幾何学的に多くなり、難しさも倍増する。さらにそれを乗り越え、デザイナーとしてのオリジナリティを發揮する、それが地域における環境デザインの醍醐味であり、これから益々求められる職能もある。デザイナーにとっては、より力量のいるシンディイことかもしれないが、“思い込みのデザインから、思いやりのデザインへ”といったスローガンは如何だろうか…。

地域社会の活性化に貢献しうる、環境デザインのためには、先ず地域への深い洞察の基づく“関係のデザイン”が必要で、商店街においては、それがエネルギーを生みだす関係として存在するような“場のデザイン”が期待される。コミュニティにおいては“活動のデザイン”も必要である。そしてそれらの結果あるいは一環として、関係のデザインをさらに止揚する“形のデザイン”ももちろん不可欠であり、これら総体を環境デザインと呼びたい。

そしてこれからは、これらを推進できる懐の深い環境デザイナーが囁きされている。

循環社会へのアプローチ

松村 みち子
MICHIKO MATSUMURA
JUDI NEWS出版委員
タウンクリエーター



1. 環境の美学

「JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE」というネーミングからは、東京や横浜のような大都市か、せいぜい人口10万人ぐらいまでの地方都市を対象としている印象を受ける。それよりもっと小さい田舎のまちや農山村のデザインはアーバンデザインというよりはルーラルデザインと呼ぶほうがふさわしい。

ところが日本語名の「都市環境デザイン会議」となると、都市と環境のデザインとも受け取れ、ならば農山村地域も対象とすべきではないかという解釈も成り立つ。この場合、都市生活のあり方はもちろん、林業や農業のあり方までが問われてくる。

テクノロジー指向で消費型の都市生活を前提としているかぎり、環境デザインを論じることは虚しい。都市基盤整備の方法にてもコンクリートやアスファルトで固める工法だけに頼ってきたからこそ、どんな山奥の地域にも自然地形に匹敵するほどのスケールでコンクリート構造物が登場したのではなかったか。

快適な都市生活が自国ばかりか南の地域の森林や自然を破壊したうえで成り立っているのなら、私たちはまず足元からライフスタイルを見なおし循環型社会を前提とした都市生活に変えていくべきだし、ひとり一人がそのような環境デザインをこそ模索していくべきではなかろうか。

環境デザインとは美しい環境づくりだと思うのだが、では環境の美しさとはどんなものなのだろう

う。最初に環境の美学について考えてみたい。

何を美しいと感ずるのかは人によってさまざまだから、美しさの基準をつくることは難しい。芸術作品の場合は人によって好ましさの度合いが大きく異なる。ある人によって好まれる色が別の人には不快な色の場合もあるし、「俗悪」のひと言で片づけられない芸術作品も確かに存在する。

しかし「環境の美しさ」は芸術作品の美しさとは性格が異なる。もっとも大きな違いは、環境が人間の暮らしと切り離しては考えられないことである。同時に、場所の特性・地域性とも切り離せない。気候、風土と人間の生活とがしっくりと調和したとき、そこの環境は心地よく感じられる。心地よく感ずることが美しさの条件であると言つても間違いないだろう。

したがって環境デザインを考える場合、人間が昔からどういう場所を住みかとして選んできたかを知ることは意義がある。

樋口忠彦氏の著書『日本の景観』（筑摩書房）によれば、日本人は流域に点在する平地、例えば盆地、谷間の平地、海沿いの平野に住んできた。実は「流域圏」という考え方は第三次全国総合計画（三全総）で出てきたものだが、日本人の居住空間をとらえるのに非常に便利な概念である。

「やまと」という言葉 자체、盆地を表していると考えられ、古代日本の都・宮殿が奈良盆地、京都盆地の外に出ることはまれであった。

谷間の平地は、川の流れによって方向づけられてはいるが、背後に山が存在していける点が盆地と似

通っている。谷間では手近に清浄な水が得られ、日当たりがよければ農耕にも適しているから人間の居住環境としては理想的であった。

英国の地理学者アップルトン氏は、人間が環境から受ける美的な満足感は、その環境が棲息するのに適した場所であることを、人間が直観的に看取ることにより得られるとしている。そして動物にとっての棲息地の条件として、身を隠すことのできる隠れ場所があることと、敵や獲物をうかがうことのできる眺望・見晴らしが備わっていることの2つをあげている。（同著による。）

日本人が好んで住みかしてきた場所は背後に山を控え、前方に平地や川が望める場所で、まさしくこの原理に当たはまっている。

私たちは公園や広場でくつろぐとき、あるいは人通りの多い場所で待ち合わせするとき、背後に何もないと落ち着かない。無意識のうちに樹木や生け垣や壁を背にした場所を選んでいる。つまりは「身を隠す場所」と「眺望」の両者が備わった場所を選んでいるわけである。

のことから、街角にせっかく金をかけた広場をつくっても背もたれできる大木や落ち着いて腰掛けられるベンチがなければ、そこは単なる空き地になってしまう。ベンチにしても、私は設置場所だけでなく互いの距離も大事だと思う。心理的にくつろげる配置にしなければ、どんなに素晴らしいベンチであっても人は（特にカップルは）利用してくれない。生き物が棲息しやすい環境の条件をヒントに施設のデザインをすることは、決して無意味ではない。

2. 都市の中での生態系の復元に向けて

次に循環型社会をめざした環境デザインについて触れてみたい。

先に「テクノロジー指向で消費型の都市生活」と書いたが、私たちの都市は再生的デザイン（リジェネレイティブ・デザイン）を目標としなければ持続不可能になる。

巨石文明で有名な南太平洋上のイースター島に住んでいたボリネシア人は、衣食住の確保より部族間の抗争と巨石像というシンボルづくりを優先させて持続できずに滅びてしまったという。

人類が生存していくためには食料とエネルギーが必要である。ところがどちらの資源も有限ではない。そこで限られた資源は有効に使い、廃棄物はリサイクルして循環使用する、自然界から得た物質は自然界に還元する、という循環型社会を構築していく姿勢が求められる。

循環型社会をめざした都市としては、昨年2月に冬季オリンピックを開催したリレハンメル市が好例だろう。同市は1988年9月にオリンピック開催都市に決定すると、さっそく自然と景観を守るために取り組みを開始し、短期間で総合計画を策定した。一般市民からもアイデアを募集した。結果として環境保全のために様々なきめ細かい配慮がなされた。そのいくつかをあげると

①ジャンプ台の斜面はできるだけ自然の斜面を利用し、コンクリート建造物はなるべく目立たない色にする。

②ジャンプ台へのアクセスは、途中に保存すべき農地があるので駐車場を離れた場所につくり、歩いて会場に行くようにする。

③アイスホッケー場の建物の高さは背景の山並みを遮らないように地面を掘り下げて建設する。ドームは可能な限り木材を使用する。

④ボブスレー会場は、まちの自然保護を優先して中心街から遠い場所に建設する。

⑤臨時用の建物は基本的に取り壊し、元の自然環境に戻すことに力を入れるなどなどである。

こういった環境デザインを積極的に進めた背景には、国が住民を対象に環境保護のための活動を推進していることがある。「環境保護軍」と呼ばれているこの活動には、一般大衆のほかボイイスカウトや主婦団体や教会等が参加している。

環境指針項目のうち5つ以上を遵守しようというパンフレットも発行されている。（図参照）

ゴミの分別収集や生ゴミの堆肥化にも力を入れており、各家々の庭先には生ゴミ用、燃えるゴミ用、燃えないゴミ用と3種類のゴミ容器が並んでいるのが印象に残った。（写真）

もちろん各家庭の省エネや環境教育も盛んに進められている。

木材のガードレール、鉄塔ならぬ木塔もいたるところで目にした。

これらは都市の中での生態系復元の試みのほんの一部であろう。

駐車場でもタイヤが乗る部分以外はむき出しのままの土でいいと思うし、オープンスペースに植える草花でも園芸用のものばかりではなく、その土地在来の野草も取り入れたほうがいい。

いずれにしても道路や公園や駐車場、あるいは河川などの都市基盤整備の中に、できるだけ自然に近い素材や工法を採用していくことが、これから環境デザインには大切だと思う。

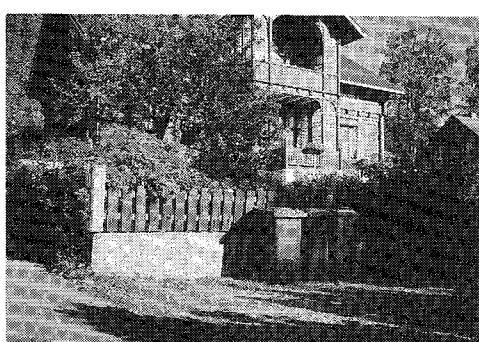
BLI MED PÅ 90-ARENES DUGNAD!



Ingen kan gjøre alt - men alle kan gjøre litt.
Slik går vi sammen om å løse de truende miljøproblemmene.

I Miljøheimervernet deler vi de store miljøutfordringene opp i små oppgaver, så små at alle kan bidra. Samtidig støtter nok til at det monner når mange gjør sin innsats.

Vi er allerede mange - og blir stadig flere.
Nå er turen kommet til deg. Blir du med?



広場のデザイン・まちのデザイン

菊野 憲一郎
KENICHIRO KIKUNO
株式会社 熊



「立案から管理まで住民の手で」を合言葉に、1986年から10年間に8箇所の辻広場が完成し、現在2箇所の広場が計画されている。

10年経って辻広場をとりまくまちの状況は様々に変化しているし、また辻広場自体も質的に変貌しようとしているかにみえる。

先日豊島区内のあるグループと辻広場を巡り歩く機会があった。二十代から五十代のまちづくりに熱心な人達の集まりだったが、辻広場に対する様々な感想、指摘、提案など聞くことができてたいへんおもしろかった。

「手作りの感じがしていい。」「メンテナンスが大変そう。」「まちの顔になっている。」「もっと座れるように。」「つくった人達の熱意が伝わってくる。」などなど。

そのなかで、特に興味深かったのは幾人かの人達から「初期のものと新しく出来たものと感じがにか違う。」という指摘があったことだ。

新しいものはまだまちになじんでいないとか、住民や行政の要望が変わってきていたとか、設計

者や施工者が違うとか、どうもそういうこととは違うことのようなのだ。なにが違うのだろうか。

当初私達が住民や区の人達とくりかえし行ってきたく辻広場づくりの手順や、原則、意義を振り返ってみることにする。

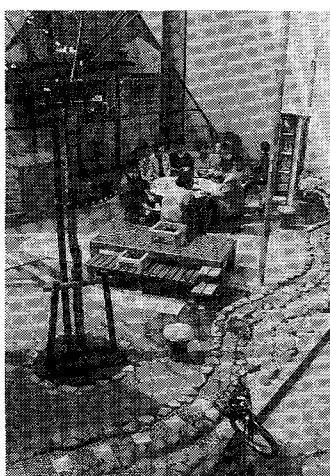
用地が決定すると約一年がかりで次のような手順でく辻広場づくりは進められる。

まず、地区住民を対象にまちづくりニュースやまちづくり祭を利用して、広場に対するアイデアや意見をスケッチ、文章などで募集する。集まったアイデアをもとに、近隣住民やまちづくり協議会のメンバーで構成された懇談会で、基本方針、素案、計画案、実施案と作り上げてゆく。この間5、6回の懇談会が開かれ、住民との個別の対応や計画案のニュースでの発表、模型の展示なども行う。実施設計が終り工事にはいると懇談会であらかじめ決めていた住民参加工事を行う。

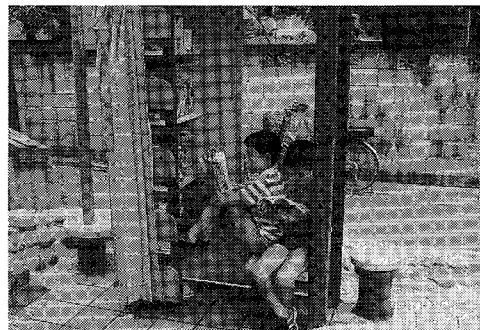
今までに小石やモザイクタイルの埋め込み、修景画の制作、植樹などが行われた。工事が完了



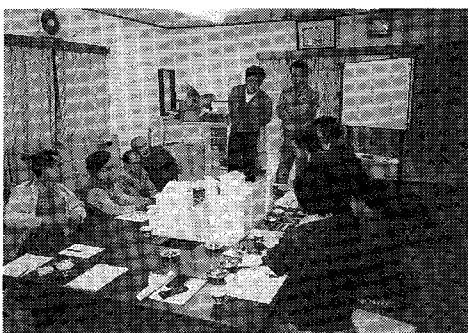
商店街をあげてのオープニングパーティー
(太陽広場)



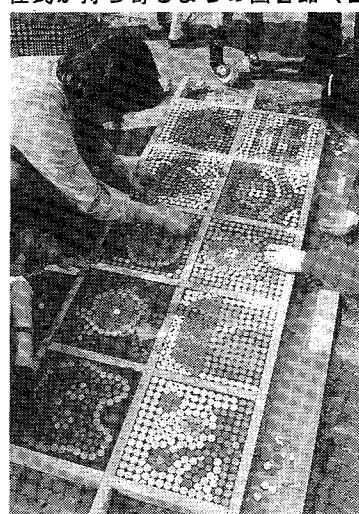
管理委員会も辻広場で開かれた
(富士山広場)



住民が持ち寄るまちの図書館(富士山広場)



懇談会で模型を見ながら案を練る



モザイクタイルで床タイルをつくる
(太陽広場)



牛ベンチにタイルを埋め込む近所の人たち
(モーモー広場)

するとオープニングパーティが開かれる。住民、行政が一体となって飾り付けをしたり、まちの人々に酒をふるまつたり、植木を配ったり、<辻広場づくり>に参加した誰もが誇らしい気持ちになる。

管理は近隣住人で管理委員会をつくりめんどうをみてゆく。ペンキの塗り替えなどもやった。

以上が手順のあらましだが、作業を通して何度も話し合いを積み重ねるうちに、私達は次のような<辻広場づくり>の目的と意義を確認し合い、5つの原則を作り上げた。

目的と意義

- ・<まちづくり>のなかでの<辻広場づくり>を目指そう。住民参加によるまちづくりの実践の場である。

- ・もともとこの地区に大きな公園をつくるには無理がある。小さなものをたくさんつくって、まちづくりへの波及効果を大きくしよう。

- ・密集住宅地の住環境の改善に有効であり、ミニ防災拠点として役立つ。

- ・公園というよりもまちの小さな行事や子供、主婦、お年寄り達にふれあいの場、日々の憩いの場を提供する。

- ・まちの歴史などかかたちとして織り込まれ、まちづくりへの関心が高まり、まちの人達が誇りに思うようなものをつくろう。

- ・比較的小さな金額で、短期間につくれる。

<辻広場づくり>5つの原則

- 1 辻広場は、道の一部である。

- 2 辻広場は、まちのミニ防災拠点である。

- 3 辻広場は、まちの歴史を織り込んだものである。

- 4 辻広場は、住民参加によってつくられる。

- 5 辻広場は、まちの名物となる。

今までの<辻広場づくり>で以上の目的、意義、原則が全て達成できたわけでは勿論ない。

このような住民との膝をつき合わせた話し合いを繰り返しながら私達が考えていたのは、不特定多数の人のための広場ではなく、使う人の顔の見えるものをつくりたい、生活習慣や場所に対する思い入れを再発見しかたちにしたい、このまちにしかないものをつくりたい、ということだった。

例えてみれば、住人ははっきりした注文住宅をつくってきたということだ。標準化されたハウスメーカーのものとは自ずと違ってくるであろう。また個性の強いものをまちに投げ入れたのだ。批判も共感も強く出てくるのは当然であろう。実際、辻広場ではいろいろな問題がおきている。まち全体の問題といってよいものだが、予想外の使われ方が出てきてとまどうことが多い。ゴミやホームレス問題はいうにおよばず、壊す、汚すなど使い方のマナーの問題、掃除や緑の管理の問題などなど。また「物のつくりすぎ、デザインのしすぎ。」果ては「こんな狭いところに税金を使うな。無駄使いだ。」などという声さえある。

しかしこうした批判がある一方、「どんどん増やして欲しい。散歩のコースが楽しくなった。」

地区外の人からも、「自分の地区でもつくりたい。この地区的顔になっている。」など、積極的な肯定派の声も少なからずある。

最近の辻広場をみると、内容が希薄になってきているように思える。批判をかわすためだろうか、無難な個性のないもの、管理偏重の標準的なものになりつつあるようにもみえるが、まちづくりと共に出来上がりつつあるまちの顔を潰してはならないし、辻広場づくりをはじめた当初の大勢のひとびとの夢や情熱を無にしてはならない。

先のグループの人達が感じた違いはこのあたりにあるのではなかろうか。

昨今、住民参加のワークショップによる公園づくりなどが盛んに行われているが、住民の公共施設に対する関心の高まりと共にどこにでもあるものではなく、ここに必要なもの、ここに住民がつくりたいものを自分達の責任においてつくりていこうとする、言い替えれば地域の顔、まちの顔、住民自身の顔を取り戻そうとする気持ちの表れのように思われる。

通一遍のアンケートやかたちだけの住民参加では到底浮かび上がってこない欲求や思いがまちには様々に存在するのだ。

個性豊かなまちをつくりてゆくには、まちづくり、辻広場づくりにかかる者達の再認識と、粘り強い努力が必要だ。

辻広場のあらまし

その1

	第1辻広場	第5辻広場	第8辻広場
全 景			
名 称	高士山公園	モーモー広場	オタガタ広場
開設時期	1986年12月	1990年5月	1995年3月
面 積	40m ²	37m ²	59m ²
接 道	接道(4m)	接道(4m)	焼道(6m)
テ ー マ	まちのサロン	まちと歴史(牧場)	寶物広場(宝物客の休憩所)
まちの歴史	水路川 ⇌ 水の流れ、碑	牧場 ⇌ 牛の道具	日の出町 ⇌ (日の出の太陽) ⇌ 鳥型ベンチ
まちの名物	高士山公園(国立公園シリーズ)	牧場(まちの歴史シリーズ)	太陽と天体(まちの歴史シリーズ)
み ど り	桜、ツタ	—	ユスラウメなど
防 灾 地 点	防災機器置き場	防災機器置き場、防火用水槽(5L)	防災機器置き場
そ の 他	まちの本館	牛の道具	段だんステージ、群馬型フェンス、星型ベンチ、時計塔
住民加工事	小石の埋め込み	牛の一部タイル貼り	一郎石貼り

地方都市整備と 環境デザイン

森 延彦

NOBUHIKO MORI

代表幹事

静岡県都市住宅部



1. はじめに

公的な都市整備と環境デザインの対応については国費補助事業制度をはじめとしたハード施策と景観条例や地区計画といったソフト施策がある。事業制度については、建設省のふるさとの顔づくりモデル土地区画整理事業やシンボル道路整備事業等々実に多くのグレードアップやデザインに配慮した事業制度が創設され実施されている。加えて県費の助成制度が行なわれるなどかなり拡充されている。けっして十分な状況であるわけではないが、以前に比べれば相当な進歩である。引き続きの事業の量（メニュー）質（内容）共に充実されることが望まれている。ソフト施策の代表は県や市町村の景観条例であり、多くの自治体で制定運用されている。条例そのものが他法令との関連で限界もあるが、行政の取組の姿勢を示すうえでは大いに有効である。また地区計画もデザインという点から活用され始めている。

このような中で、静岡県下の掛川市と浜松市を例に地方都市の実践例をみるとこととする。

2. 掛川市と浜松市の事例

掛川市の都市づくりに対する取組は古く、またユニークな取組で知られているところであるが、目下掛川城の復元と城下町風まちづくりを積極的に展開している。着目すべき点は、地域性や歴史性といった地域のアイデンティティの象徴として本物志向の城の復元とその城下（中心市街地）の歴史的町並の近代的景観創出にある。とりわけ都市改造型の土地区画整理事業を行う中で、その事業を単に基盤整備に終わらせることなく、「城下町風街づくり地区計画」を定め、建物本体は無論ファサードの建築を助成するなど積極的に街並を誘導してきたことは、市民参加の街並デザインとしても評価されると考えられる。ハードとソフトの歯車が上手に噛み合った事例である。伺うところによると、7月現在、天守閣に登られた方は、オープン以後一年数か月で60万人を越えたという。都市の活性化にも寄与しているのである。

浜松市の事例は駅周辺の都市改造大規模プロジェクトである。昭和40年代後半すでに鉄道の高架化や土地区画整理事業に着手した大規模かつ長期

的プロジェクトである。このプロジェクトの特徴は、都市環境デザインの重要な側面である土地利用転換や都市施設配置あるいは土地操作等を含めて都市デザインを大規模に行った点である。鉄道高架、駅前広場、駐車場、歩行者空間、幾つかの公共建築物、商業ビル等々の官民一体の複合都市開発である。そして、この地区の整備の集大成ともいべきアクシティが一昨年完成したところである。このプロジェクト地区は、浜松市の「顔」であることからメッセ・コンベンション施設や浜松を象徴する楽器博物館も整備されたところである。

この2つの事例は、いづれも画一的なコンセプトや手法によるものではなく、地域性を色濃く出している事例である。また、単に市街地など局所的な領域を越え、都市全体あるいは周辺都市との関連も含め、地域性（ローカリティ）を反映したもので、掛川市でなければ、浜松市ならではの都市デザインなのである。

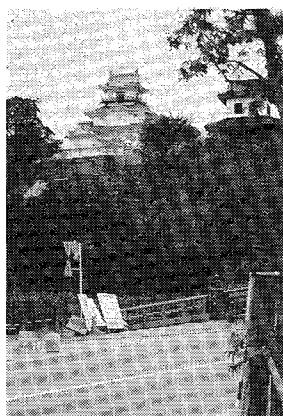
3. おわりに

地方の都市整備に限定した事例を紹介したが、静岡県は田園・集落地景観、自然地景観、観光地景観等々といった多様な環境デザインが求められており、必ずしも都市というより地域としてのより広域の空間の広がりを対象として考える必要がある。静岡県の景観形成ガイドプランにおいても、地域性、風土性、景観の等質性などにより県下を10数地区に類型化している。

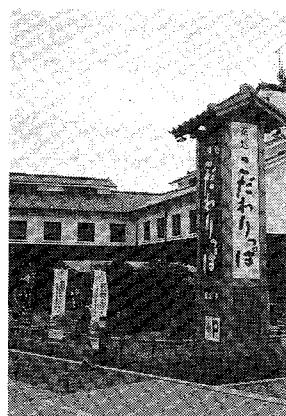
ともあれローカリティを場所性として受け止め、アイデンティティを高める都市及び地域デザインが求められると考えられる。

また、その実行性を上げるために、冒頭述べた、事業制度の一層の拡充や限界もみられる景観条例の拡充や都市計画の諸制度の積極的な展開などが必要である。

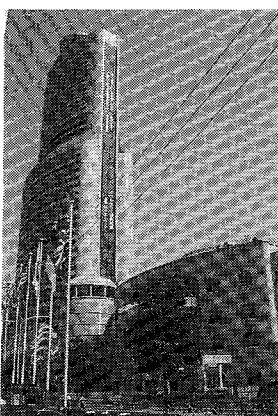
まちづくりにおける地方分権が進めば進むほど、地方の責務も増大するが、その中で、環境デザインの領域も大きく膨らんでいくことになる。真に地域性が反映できる環境デザインが可能である。そのためには、行政だけでなく、理解あるデザイナーやプランナーとの協調も必要である。



掛川城：本格木造による再建。
H6.4オープン



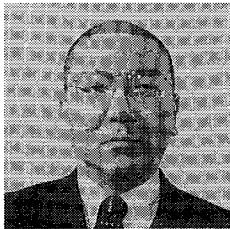
城下町風街づくり：掛川城周辺の街並み景観のコントロール



浜松・アクシティ：浜松駅前にH6.10オープン

アメリカの ランドスケープ デザイン事情 (その2)

三谷 康彦
YASUHIKO MITANI
国際委員
PWWJ



前号で述べさせていただいたアメリカのランドスケープ・アーキテクトの身分的な概要などの一般的な話に引き続いて、本稿では、私の現在所属するピーター・ウォーカー・ウィリアム・ジョンソン事務所（以降は略してPWWJとする）のデザイン・システムに関して、その内側からアメリカのランドスケープ・アーキテクト事務所で行なわれる具体例の一つとして述べようと思う。

事務所のオーガニゼイション

現在の所、総スタッフ数はプリンシブルのピーター・ウォーカー（略してピート）とウィリアム・ジョンソン（略してビル）を入れても22名と、その規模としては比較的小さなアトリエ・サイズとなっている。

'91-'92年頃であったと思うがアメリカ西海岸が、東海岸に遅れること3-4年経って経済不況に見舞われたとき、ドイツ、フランス、日本等のインターナショナル・プロジェクトにいち早く力を入れていたPWWJでは、さほどその影響を受けずに済んだ。

一方、不況のあおりをまともに受けたSWA、SASAKI ASSOCIATES、POD、EDAW等の大手ランドスケープ事務所をとびだしセミ・プリンシブル・クラスの優秀なデザイナーたちは、こぞってPWWJの扉をたたき、一時期など40名を優に越える所員数となった時もあった。

単に新しいデザインの追究のみならず、事務所経営、プロモーション戦略、はては事務所スタッフ達の席がえに至るまで、全てに関しての目配りを怠らないでは気が済まないピートにとって、事務所がどんどん物理的に大きくなることは彼のSWAコーポレイト事務所時代の企業管理職に逆戻りすることとなりかねず、優秀な人材を多数抱えながらも別の意味で、彼にとっては危険な時期であったと思われる。

一般的に不景気な時ほど、企業にとっては優秀な人材を集めるのが簡単なのは洋の東西を問わず真理であろうが、アメリカやヨーロッパ諸国から好景気の日本企業に職を求めた若手の建築デザイナーやランドスケープ・アーキテクトが多く見うけられたのも、この頃であったように思う。

そのうちの大部分は、日本のいわゆる「特殊事情」を決して理解すること無く本国へ帰ることとなり、その後も日本に残ったほんの一握りの優秀なデザイナー達によって東西の実務レベルでのデザイン交流が行われているのが現状のようだ。

その西から東、東から西の交流の全く逆をゆく私にとって、日本に残ってがんばっておられる彼等の苦労は良く理解できるし、本誌のこの場をお借りして、心より声援をお送りしたいと思う。

話が横にそれた。さてこの夏は、PWWJ事務所ではアメリカのランドスケープの将来を担う事となるであろう学生達に対するデザインの実務教育のため、ハーバード、バークレー、ペンシルベニア、バージニア、イリノイ等各大学からの選抜（？）された大学院生9名を集めてサマースクー

ルを行っているので、事務所内は若さに溢れ例年なく生き生きとしている。

これは、ピートがSWA時代に一時期行っていた学生のための実習教育のリバイバルであるが、実際、ともすれば抽象的なデザイン論や現実になれたデザインに終始しがちな学生達にとって、第一線事務所の雰囲気を味わい、デザイン実務の何たるかを経験することのできる素晴らしい機会となっている。

単なるアルバイト学生に対するような、一般的な事務所対応とは異なり、一週間ごとに現実のプロジェクトが行なわれるフィールドに出向き、その場でデザイン課題を与えられ、そのスタディー結果・デザイン解決法を各々の学生が事務所全員の前で発表するそう言った作業を毎週、2ヶ月の間くり返すのだ。

ピートやビルあるいはその他のスタッフのクリティックに答え、各自の考えを主張し、議論するなかで、言葉の、そして心のコミュニケーションの技術も併せて学ぶこととなる。

こういった形のサマースクールは、日本のコンサルタント事務所でも十分行えると思われるし、またどんどん行っていくべきだろうと思う。トータルなデザイン・コミュニケーションの方法は、明らかに学校で習う製図や図学あるいはパースペクティブ・ドローイングのみでは十分ではなく、心を揺さぶる様なプレゼンテーションの総合技術でもあることを認識するならば、その教育は優秀な実務レベル家の協力・指導なしには、行なうことは不可能であるのは言うまでもない。

さて、事務所総員22名のスタッフの内訳は、ピートやビルを加えたランドスケープ・アーキテクトが15名、その他7名は、ワープロ文書やコンピューターの専門職1名、受付・ファックス管理・ゼロックスコピーなど事務所雑務担当3名、入金・出金・請求書など会計関係2名、スライド管理も行うプロのカメラマン1名となっている。

事務所総数の約3分の1が言わば非生産作業に従事している訳で、事務所に参画した当初は私も、何とゆう無駄と考えたものであるが、そのうちにランドスケープ・アーキテクトがそのプロとしての仕事に、より集中できる、もっとも合理的なシステムであることに気が付いた。

事務所のいわば「サービス機関」を効率良く使いこなせるようになると、自分が本当にやるべき事以外には一切、頭を煩わせ体を使うことが無くなるのだ。

2人のプリンシブルの下には、主に契約関係をフォローするパートナーが1人、デザインのプロダクションの際のクオリティー・コントロールを行なうパートナーが2人、デザインの技術的な検討及び設計管理に責任を持つパートナーが2人と、合計5人のパートナーがいる。

これらのパートナーは全て、ピートがSWA時代に育てたか、あるいはピートがハーバード大学院の教授時代に手塩にかけた優秀な教え子であり、

またピートの実験的な事務所を1980年代の始めにスタートさせた時のオリジナル・メンバーでもある。

そのことは即ち「ピートの世界」は熟知しているが、逆に又それは「ピートの世界」しか知らない事にも通じ、時と場合によっては良い風にも悪い風にも作用する。

そういう観点からすると、ビル・ジョンソンのもう1人のプリンシプルとしての触媒的な役割には、計り知れない重みがあるのだ。

デザイン・レビュー・システム

事務所に依頼が来たプロジェクトは、その大小に関わらず100%事務所のプリンシプルであるピーター・ウォーカーおよび（あるいは）ビル・ジョンソンのレビューを受けることとなる。

2人のバックグラウンドの相違により、ピートは主にデザイン的な、ビルは主にプランニング的なレビューをとソフト的な区分けをしているが、多くの場合はプランニング・ステージからデザイン・ステージへのトランジショナルな部分でプロジェクトの大枠が決まるので、二人揃ってのプロジェクト・レビューも珍しくない。

ピートによるデザイン・レビューは、徹底的な検証に尽きる。

多くの場合まず最初にピート自身によって、フリーハンドのコンセプチュアルな平面図スケッチが彼の一人語とも説明ともつかぬ、しゃべくりとともに、稻光のような早さでプロジェクト・チームの前で描かれることとなる。

それは、ピートの常づね持ち歩いているグリッドの入った小型のノートブックに、レストランでの待時間に、あるいは飛行機の機中で、あるいは旅先のホテルで、あるいは退屈な会議の合間に書き記したいいろいろなアイデアの、まるでジグソーパズルのような集積のようにもみえる。

また、彼がプロジェクト・サイトを訪問したときに持った、その場の印象、あるいは場の力から受けたインスピレーションの再構築を、自分自身に問直しながら二次元の紙の上に、まるで忘れてしまうのを恐れてもいるかのように、大急ぎで書き記しているようにもみえる。

ピートは、この作業を続けながらプロジェクト・チームのメンバーからのあらゆる質疑に答え、提案に応じ、断面などによるデザイン検討の必要がある部分に関してはセクションを切るようにその指示を出し、またモデルなどを作成して検討する必要のある部分に関しては、その要望を出す。

こうしたデザイン・レビュー第1ラウンドの後は、膨大な量のデザイン・スタディ作業がプロジェクト・チームによって始められる。

一方、ビルによるプロジェクトはピートの場合とは対象的に、直感よりもむしろ論理を大切にし、チーム内の議論・対話のなかで計画は進められる。もっとも最終的には、彼の卓抜したアイデアやグラフィック・スケッチ能力を十二分に活用したプレゼンテーションとする方が強いインパクト

があるため、ビルの独断場となることがほとんどである。

ビルのソフトな人柄および語り口は、その説得力のある論理と美しい絵とあいまって、クライアントや、プロジェクトに絡む市民団体の代表等のなかにも、ビルのファンとなる人が多い。

いずれにせよ、それぞれのプロジェクトにはプロジェクト・マネージャーが決められ、全体のフィー（設計料）のなかで、あるいはデザイン・ボリュームのなかで、プロジェクトがバランス良く収まっているのかの検討を行いながら、日々の作業が進められる。

言い替れば、プロジェクト・マネージャーはあらかじめ想定される作業量を的確に把握し、どの段階で誰のインプットを如何に効果的に行なうかをコントロールする責任と義務がある。

「誰のインプット」の中には、デザイナー・スタッフのみならずピートやビルもむろん含まれる訳で、言うなればフィーのなかでPWWJの各々のスタッフの時間を買い取りながら、経費も含めた上で、いかに質の高いプロジェクトとしてまとめあげる事ができるのである。

プロジェクト・マネージャーの仕事は事務所にとって重大である。

ウォール・ピンナップ

プロジェクト・チームによって用意された全てのデザイン・スタディ図は、事務所のウォール・スペースにピンナップされ、またスタディ・モデルがスタッフ全員の目に触れる所に展示されることにより、ピートによるデザイン・レビューのみでなく、事務所全員によって直接的・間接的なレビューを受けることとなる。

こうして数限りなくデザイン・スタディおよびレビューが繰り返される中でモノの形が少しづつ決まってゆく。

当初ピートによって手早くフリーハンドで描かれた原スケッチと、スタディ・レビュー・プロセスを繰り返した結果としてのハードライン図は当然のことながらよく似たものとなるのは予想がつくが、特にそのパーツ（樹木、ベンチ、舗装パタン・・・）のレイアウトやそれぞのプロポーションに関しては、原スケッチがフリー・ハンドながらいかに正確で、的を得たものであったかに、多くの場合には後ほど気がつく事となる。

またある場合には、原案からレビューの度にどんどん違う方向に形が変わっていく場合もあるし、むろん当初のアイデアがうまく機能せず、それをあきらめて全く別の案に乗りかえることもある。

いずれにせよ、デザイン・アイデアを「かたち」に置き換えるまでには、膨大な量のスタディに時間が費やされるのだ。

事務所内では常に同時進行でいろいろなステージのプロジェクトが少なくとも10本は動いており、それぞれのプロジェクトの抱える問題点を解決するためのデザイン・スタディ用およびデザイン・レビュー用の図面が、それぞれのプロジェクトご

とにグループ分けされていて常に壁一面に貼られている。

また、時としてはプロジェクト間での壁スペースの奪い合いとなることもある。

そう言った観点からすれば、デザイン系の事務所にとって図面をピンナップすることのできる「壁」は、デザインを研ぐ上で必要不可欠なものと言う事ができるかもしれない。また、デザイン系の事務所を訪問した際にウォール・ピンナップの「ボリューム」と「質」を見れば、その事務所のデザイン・レベルがある程度察しがつくとまで言われているようだ。

フライデー・5

事務所では毎週金曜日の夕方5時から、一週間の終わりを締めくくるカジュアルな内輪のパーティーが開かれる。

ワイン、ビール、ソフトドリンク、チーズ、果物、ナチョ、ポテトチップス等が事務所持ちで用意され、各々の好みの飲物を片手に仕事を離れた雑談に花を咲かせ、全員で普段とうって変わったリラックスした一時をすごす。

個人主義の国アメリカでは、ふつう仕事以外のひとときをスタッフと共に過ごすという事はめったにしないので、非常に珍しい習慣だと思う。

また、隔週ぐらいの割合でゲストスピーカーとして建築家、彫刻家、環境芸術家、グラフィックデザイナー等を招き、スライド・プレゼンテーションや新鮮な話題の提供を酒の肴として、楽しいときを過ごすこととなる。

この通称「フライデー・5」の催しは私の知る限り途切れること無く続いている、事務所内で日常の作業レベルでは決して起こることのないチャンネル間のコミュニケーションが発生する、またとない良い機会となっているようだ。

デザイン・システムの「前半部分」と「後半部分」

以上、PWWJでのデザイン・システムの「前半部分」、あるいはデザインの為の仕組み、事務所の仕掛に関しての一部分を述べさせていただいた。

「前半部分」と申し上げるのも、上に述べたシステムはデザイン・アイデアがグラフィック表現あるいはモデル表現となるまでの、いわばSCHEMATIC DESIGNレベルからDESIGN DEVELOPMENTレベルに至るまでの位の過程において事務所で行なわれる方法論であるに過ぎないからである。

(SCHEMATIC DESIGNは日本の計画・設計作業業務の流れの中での語彙に強いて訳せば基本計画となり、DESIGN DEVELOPMENTは基本設計となるが、やっかいな事に各々の国の言葉でイメージする実作業の内容およびその作業精度は、かなりかけ離れたものとなる。

そのあたりの、日本とアメリカの「作業」の流れに対する考え方の違い、および各々のフェーズでの「作業報酬」に対する考え方の違いに関しては、私もずいぶん調整に泣かされた経験を持つ。この話に関しては、別稿で又の機会に詳しく述べたいと思う。)

「デザイン」を、実際に施工精度の高いBUILT-PRODUCTとして完成させる為には、単にデザイン図のみを示したところで、デザイン意図が確実に伝わる保証は何もないばかりでなく、かえって誤解を招く場合が多いのは、皆様も良く御存知の通りである。

デザイン意図を、より確実に伝える為の段階手法として、DESIGN DEVELOPMENT(ルーズな意味での基本設計)、CONSTRUCTION DOCUMENTS(文字通り実施設計)、FIELD OBSERVATION(設計監理)の各々のフェーズが有るが、それぞれのフェーズにおいても、PWWJの「物づくり」の為のシステムが存在する。

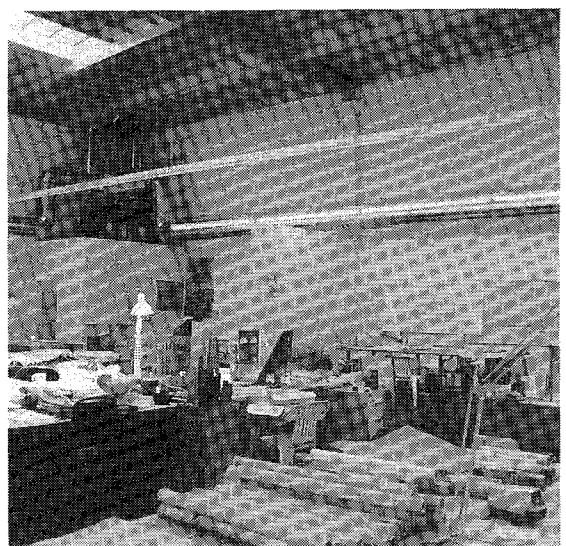
上に述べたいわゆる「デザインの為の仕組み」としての前半部分と、「実際の物づくりの方法論」としての後半部分とがうまく一体になって、はじめてトータルな「デザイン・システム」として完結するものだと思う。

次号では「物づくり」の為のシステムに関して述べさせていただこうと思う。

つづく



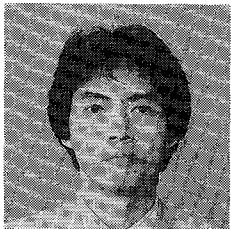
事務所風景 I



事務所風景 II

■東北ブロック

山崎 洋二
YOZI YAMAZAKI
東北ブロック幹事
都市創造研究所



東北ブロックは、仙台市のアーバンデザイン推進事業の一環として行われた、一般市民、学生、行政などの参加による「杜の都デザイン会議」に、コーディネーターとして参加しました。会議は、ワークショップ形式で、仙台都心の将来像を考える「INSIGHT SENDAI」をテーマに、4回にわたって行われ、杜の都としての仙台都心のキーワードは、「環境」「回遊」「情緒」ではないかということが浮き彫りになりました。

「環境」は、低公害、資源リサイクルを実現することによって、土地利用におけるこれまでの用途純化の方向から多様な用途の混在を可能にし、職住近接、都心居住を指向することです。さらに緑や水は生活のツールとしてデザインすることです。「回遊」はバラバラになってしまっている多様な要素を再び結び合わせ、面的に複合的な街をめざす視点といえますし、「情緒」は、杜の都がこれまで培ってきた自然との共生の歴史や生活文化を今の暮らしに生かすことです。このような方向を推し進めることができ、仙台の個性ある都市デザインを引き出すことになるのではないかでしょうか。

ひとつの将来像として、参加者の声を反映させ

ながら、都市全体を考えることは、ともすると個人的な発想にとらわれがちな街への思いをぶつけあうことによって、共有できる部分をそれぞれに見つける契機となったという意味で収穫だったと思います。

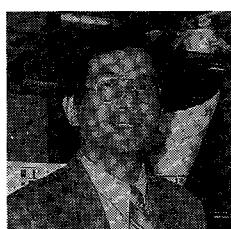
このような、市民の参加するワークショップは、これまでほとんど行われたことがなく、市民も不慣れで、反省点はたくさんありましたが、「継続してほしい」「有効と思う」といった感想もいただいています。

ブロックとしては、今後とも、住民を巻き込んだ街づくりや都市デザインの議論を活発化させるべく、何らかの形で関与していきたいと考えています。さらに、プランナー自ら、各分野の連携強化も含めて、いま分断されている様々な要素の〈間〉を意識しながら、率先してつなぐような作業を進める必要があると総括しています。

なお、この結果については、限られた部数ですが各ブロックの幹事の方に本部を通じて配布することになっていますので、参考にしていただければと思います。

■北陸ブロック

水野 一郎
ICHIRO MIZUNO
北陸ブロック幹事
樹木計画研究所



『会員研究発表会』の試み

会員数19名の北陸ブロックでは、少人数ゆえに、お互いの研鑽やコミュニケーションがはかられるメリットがある。そのメリットを活かすために、会員それぞれの場での成果・試み・疑問・提案・相談を持ち寄って会員発表会を企画した。初の試みで準備の時間的余裕も少なかったにもかかわらず、10題の発表がなされた。

1 当日のプログラム

5月27日（土）14:00～19:00

①上坂 達朗

「金沢の用水再生を目指して」

②漆崎 忍

「すかっとランド九頭竜」

③片岡 廣夫

「白山ポケットパークの設計」

④坂田 守正

「地域固有文化とパネルアートの研究」

⑤高橋 宏子

「建築系(デザイン科)における「環境デザイン」」

⑥玉森 慶三

「気がつくことから始まる「わたしの知ったデザイン、わたしの経験」」

⑦堀 正浩

「都市計画マスター論についての一考察」

⑧横山 裕

「構想・計画から設計、そして具体化まで」

5月28日（日）9:30～11:00

⑨水野 一郎

「あたりはー 土木構築物における許認可」

⑩長谷川 智也

「つま先15cmの誘惑と借景」

これらの発表者を含めゲストとして、岡崎甚幸（福井大教授）、森俊偉（芝浦工大講師）、駒谷康文（駒谷造園）の入会予定者3名も加わった。

2 総括

発表は、造園、土木、都市計画、環境教育など多岐に渡り、各人がそれぞれの場で真剣に取り組み、よい結果を生みつつあることが報告された。

発表形式も論文だけではなく、OHP、スライド、ビデオなどが上手に使われ、JUDIらしいビジュアルな会となかった。

悩みは、行政等の発注側に都市環境デザインの認識の薄さ、契約の不備、監理業務の欠落、全体とは無関係の部分的事業、デザイン決定プロセスの不明瞭さなど多くの課題があることで、日常の斗うべき障害として大きなエネルギーを費やすいることが浮き彫りにされた。

またこういう小さい会は、往々にして甘さが出てしまうものだが、初めての試みにもかかわらず会員間で疑問や批判の意見も出たように、素直に討議ができる雰囲気が生まれたことは大きな成果であった。

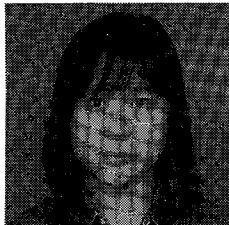
次回は準備期間を長くとって全員参加を目指すと共に、そこから出た問題を1つ1つ解決していく方策も検討していきたい。また他ブロック会員の発表、コメントーター、ゲストスピーカーなどの参加も考慮していきたいので、その際は御協力をお願いしたい。

■中部ブロック 白川郷の明日を語るJUDI あすまち セッション 白川村Part1

玉木 伸秀
NOBUHIDE TAMAKI
中部ブロック幹事
(株)景観工学研究所



山口 雅子
MASAKO YAMAGUCHI
(株)景観工学研究所



中部ブロックでは、平成7年5月12日（金）に、世界遺産登録申請中である岐阜県白川村の合掌集落の視察と白川村役場において、セッションを開催した。なぜ今、私たちがJUDI会員として白川村を訪れ、「講演会」ではなく、「セッション」という形式で行なったのか、その経緯と内容について報告をしたいと思う。

1. はじめに

白川郷に住む人々は、伝統的家屋と周囲の自然環境を守り、次の世代に残していくために保存対策に取り組んでいる。現在、世界遺産登録への申請を行っており、将来は東海北陸自動車道や中部縦貫自動車道ができることから、注目を集めている地区である。日本の伝統的家屋と美しい風景を残していくことはもちろん大切なことであり素晴らしいことだが、実際に住んでいる方々にとっては大変な努力や辛抱を強いられるため、葛藤や論議があって当然のことだろう。

この集いをシンポジウムとせずに、「白川郷の明日を語る」セッションとしたのは、一般にありがちな大先生の講演会というのではなく、地元の人々と都市環境デザインに携わる者との自由な意見交換の場としていきたいという思いからであった。実際にそこに住んでいる方々の熱い思いや苦労・不安といった生の声を聞き、一般に様々な問題を考え、白川郷の未来について語り合うことに意義があると考えたからである。私たちのこの提案を白川村へ伝えたところ、谷口尚教育長より快諾いただき、白川村教育委員会のご協力を得て、白川村合掌集落の視察及び白河村役場において、セッションを開催することができた。

2. 白川村視察

この日はあいにくの雨天だったが、白川村教育委員会事務局、宮丸和之主任の案内により下記のコースを視察。低く垂れこめた雲の合間から望む目の覚めるような山の緑、しっとりと雨に濡れた合掌造りの家並みもまた、風情があった。

- ◆荻町跡展望台より合掌村全景を眺めながら、説明を受ける。
- ◆バスで、重要文化財指定、築後約300年の「和田家」をはじめ、集落を周り下車。
- ◆徒歩により荻町集落内を視察。新しく設置されたサインや土産物店、民家などを巡る。
- ◆約200年前に建てられた、珍しい茅葺きの庫裡のある「明善寺」を見学。僧侶より合掌造りの仕組みや造り方、<結>という茅の吹き替え制度、数々の知恵等について説明を受ける。
- ◆集落を視察しながら新しくできた吊橋「あい橋」を渡り、庄川対岸の合掌造り民家圏へ。バスに乗って役場へと向かう。

3. あすまちセッション

- ◆セッション出席者／JUDI会員及び関係者18名と下記の白河村2名、岐阜県1名、村民2名。
- ◆テーマ及び進行／白川村の現状と将来について住んでいる立場、環境デザインの仕事に携わる人間の立場から自由に雑談形式で話し合いを行う。

以下はその内容を要約したものである。

<観光客と村人との思いのギャップ>

今年の12月にも白川村の世界遺産指定が決定される予定だが、白川村の良さは荻町保存地区だけでなく、合掌造りを取り巻く山々などがいっしょになって歴史的景観をつくっているところにある。これまでの“自然との戦い”から“自然との共生”的時代へと村が一体となって取り組んでいくことが重要なポイントであろう。

村の人々は文化財を守りながらそこで暮らし、経済のために生産していかなければならない。外観は昔でも、中は現代の暮らしが営まれている。他の地域では人口が減っても、荻町は東京や大阪、名古屋から嫁が来るため減っていないが、古いものと新しいものの間で様々な問題がある。現在、民宿を中心に下水道整備が行なわれているが、これは住民の生活レベルの向上もさることながら、観光客のニーズに応えるためもあるという。電話で予約の際水洗かどうかたずねて、水洗ではないと断る人も多いとのこと。人間は勝手なもので、合掌造りの家の裏側に冷暖房機の室外機が見えたり自動販売機が置かれていると興奮する一方で、観光客としての利便性は求めてしまうのである。

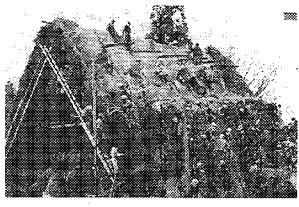
もうひとつ、課題となっているのは、既存の建物で合掌村の風景にふさわしくないものや、新しく造られる建物への規制への理解である。観光客は簡単に「あの建物を何とかすればいいのに」と思っても、直接観光の利益を享受しない人々にとっては、変えることへの抵抗や難しい問題があるのだ。村の保存委員会が指導や話し合いを重ねてもなかなか協力してもらえない場合も多いという。

<白川村のサインについて>

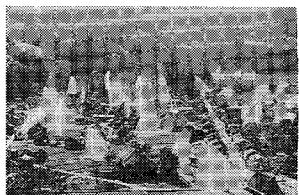
村を訪れる観光客が目的の建物や道がわからず、村人にたずねるケースが多いことから、村では審議会を重ねて新しくサインを設置したばかりであった。サインについての意見は下記のとおりである。

- ・わかりにくい。
- ・風景との調和を考えると、もっと低い位置に石などで造る方が合っている。
- ・低過ぎると冬、雪で見えなくなってしまう。
- ・ニューヨークのサインのよう。風景に対し、サインの方が目立ち過ぎる。
- ・白川村へ来るまでに必要なサインがあって、ここへ来たら学習であり、来る人のマナー。
- ・サインがなくても地図だけでいいのでは。
- ・世界遺産になって今度は外国人向けに英語の看板が必要だという話にならないよう、「ここは観光客に迎合しないまちなんだ」と居直ってもいい。

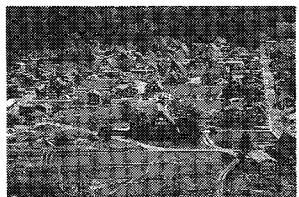
私たちは、他市町村のサイン計画の仕事に携わっているが、そもそもそのまちにサインが必要かどうかという議論はあまりなされていないように思う。また、「誰のための、何のためのサインなのか」「景観と利便性とどちらを優先させるべきなのか」といったことについても考えさせられた。



合掌づくりの屋根の吹きかえ
（「結制度」）



10月下旬に行われる放水訓練



展望台から眺めた
荻町保存地区



展望台で説明を受けながら
荻町を観察するJUDI会員

<駐車場と通行規制>

現在、荻町の中心部に無料駐車場があるが、平日はともかく行楽シーズンともなるとすごい列をなして渋滞になってしまい。観光客を不自由な思いをするが、住民も車での移動ができなくなってしまい、深刻な問題となっている。会員からは町の中に駐車場を入れない方がいいのでは、という意見が多く出されたが、この駐車場がなくなると買い物客が減ってしまうと周辺の商店は心配しているのである。荻町から川を隔てた反対側に駐車場が設けてあるが、あまりにも景観的配慮がなされていないという意見が多かった。

会員から出された案としては、「離れた場所に景観と調和する植栽で囲った駐車場をつくり、そこからシャトルバスを町中まで走らせる」という意見が出された。中は地元の人の利便性も考えて観光客はちょっと不便であっても、白川郷の風景と生活を守るという方が世界遺産としての価値があるのでないだろうか。

<もっとビジョンを持った明日の白川郷へ>

今回、初めて白川村へ訪れた会員は、日々にその素晴らしい合掌集落の風景に感銘を受けていた。ただ、今後のまちづくりの方法論的には、重要な部分が明確ではない、コンセプトがぼやけているという意見が出された。「白川村は今後どうあるべきか、風景を含めて合掌造りの建築物をどういう形で残していくべきか」という、村のポジショニングを明確にすべきだということである。ここは守り、ここは迎合しない、と自分たちで判断できるよう、勉強会などをを行いながらゆっくり進めるべきであるという意見もあった。

観光地としての雰囲気が強くなっていくのはいかにも残念である。もっと生活の営みみたいなものが見えてくるといいのではないだろうか。村の人々も、「白川村は観光があったからここまでになったが、住みにくいのは事実。お客様には夏は涼しく、冬は暖かくなんて説明しますが実際はそんなことない」と話されていた。今後の白川村をどうしていくべきかというアイデアとして下記のような意見が出された。

- ・保存はしながらも何か生活を感じさせるものはほしい。あくまでもわかってくれる人たちだけ来ればいいという姿勢で本物を維持していくべき。生活環境自体がうまく保存されていくエコミュージアム的なものなど、人々をどうやって魅きつけるかを考えていくといいのでは。
- ・ハード的なことはもちろん、ソフト面を考えなくちゃいけないと思う。
- ・世界遺産になって人が大勢来た時にどうするか。農村民宿とか、生活スタイルをなるべく変えずにやっていけるような方法を考えねば。

・どうも文化遺産=観光というように考えているような気がしてならない。生活と建物を残すことが遺産。大家族制度によって守られてきた合掌造りや生活様式をこの変化していく時代の中でどうやって守っていくかが課題。

・急いで白川村が変わることはない。100年後のビジョンがあって考えていくもの。最終的方向に育みながら、そこに向かって現在のパワーを蓄えていくべき。世界遺産ということを軽く捉えてほしくない。

・伝統をもっとつくってほしいですね。辻を曲がったときにそこに物語があれば見えてくるもの、感じるものも違ってくるはず。語りべも今から育てていかないと手遅れになってしまいます。

様々な意見が活発に交わされたが、この会合をきっかけに、私たち会員もそれぞれの専門的立場から、相談にのれるようにしていきたいと思う。

4. おわりに

役場でのセッション終了後、場所を宿泊先である「城山荘」に移して、仕事の関係で昼のセッションには参加できなかった松村みち子さんを加えて、懇親会が行われた。白川村教育委員会の谷口教育長と宮丸主任、村民の立場からお話をいただいた野田重夫さんと尾崎清さんもご同席いただき、なごやかな雰囲気の中、交流を深めることができた。こうして実際、白川村をたずねて、会員同士が一緒に見たり聞きながらそれぞれ違った立場から意見を交換しあうことは、非常に意義深いことであると感じた。特に仕事絡みではなくJUDIとしてたずねたことで、役場の方々や村民の方々と自由に語り合うことができたように思う。

出席いただいた村民の方のお話によれば、どうしても合掌村を守ろうとすると、その利害に關係しない人たちから規制を強いられることへの反発を抱かれること、そして村民すべての人たちの理解を得ることが難しいとのこと。こういったことは、私たちが日常、仕事の中でも経験することではないだろうか。貴重な風景や文化を守ること、より素晴らしいまちをつくることは、利害を超えてみんなの財産となることをすべての人が理解してこそ真のまちづくりであると思う。

目の前のことだけでなくもっと長い目で物事を見つめ、どうあるべきかを判断していくような意識及び知識は、もはや専門家だけではなく一般の人々も持たなくてはいけない時がきている。私たちJUDIの会員は個々の仕事の研鑽に励むことも重要だが、こうした活動を通じて一般の意識の啓発をしていくことも大切であると感じた。また、白川村へは「世界文化遺産」決定の知らせが届く頃であろう、晚秋から冬にかけての間に再度たずねて「あすまちセッションPART2」を開催する予定である。

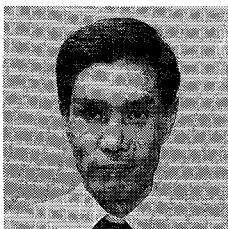
■関西ブロック

江川 直樹
NAOKI EGAWAN
関西ブロック幹事
現代計画研究所大阪事務所



■四国ブロック

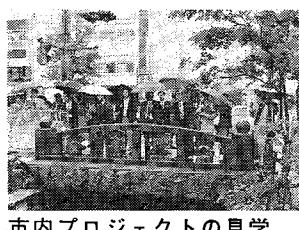
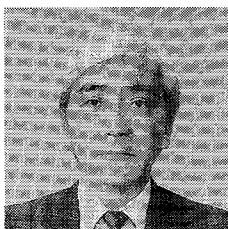
林 茂樹
SHIGEKI HYAYASHI
四国ブロック幹事
林建築事務所



■九州ブロック

シンポ
「佐賀の風土と
環境デザイン」
開催される

岡 道也
MICHIYA OKA
九州ブロック幹事
九州芸術工科大学



市内プロジェクトの見学

都市環境デザインセミナー95

例年、2月から毎月開催してきた「都市環境デザインセミナー」であるが、本年は、震災の影響で、4月からの開催となった。

◆第1回 4月22日(土)

「<これは困った環境デザイン>が生まれる背景」

講 師：栗本あおい

司 会：鳴海邦碩

参加者：20名（会員外3名）

◆第2回 5月27日(土)

「震災を契機に都市環境デザインを見直す」

問題提起：有光友興 江川直樹

佐々木葉二 田端修

コーディネーター：鳴海邦碩

参加者：32名（会員外16名）

◆第3回 7月1日(土)

「オープンスペースを考える」—公園を中心に—

問題提起：松谷春敏 宮前洋一

小浦久子

コーディネーター：鳴海邦碩

参加者：31名（会員外13名）

◆第4回 日時未定

「オープンスペースを考える」—道路を中心に—

第4回都市環境デザインフォーラム・関西

現在10月末の開催に向けて、フォーラム委員会（委員長材野博司）で、震災後の復興も視野に入れながら、「まちのアイデンティティ」をテーマに検討中（フォーラム委員会は5月27日、6月13日、7月6日に開催）

四国ブロックの動き

4月22日にブロック事業『四国ブロック会員会』を香川県高松市の讃岐会館で開催しました。

今秋に主管することが決まっている全国ブロック幹事会の開催に併せて、街なみウォッチングと都市環境デザインフォーラムを徳島市で開催することとし、徳島のメンバーを中心に実行委員会を組織することなどを決めました。現在11月18・19日開催に向け準備を進めており、会員の皆様の参加をお待ちしております。詳しくは別紙の案内状をご覧下さい。

6月18日には兵庫県津名町において「シンポジ

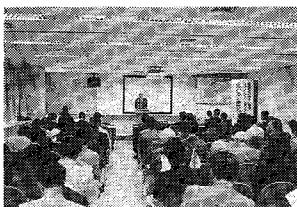
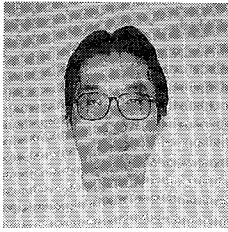
ウム・淡路島の復興を考える」（淡路島環境会議・徳島景観研究会主催）を四国ブロックで共催し、JUDI四国からは会員の澤田俊明氏が被災調査報告を行い、山中英生、島博司の両氏がパネラーとして参加してパネルディスカッションを行いました。このなかで、都市と違った村型コミュニティの生きている淡路島では災害時の不明者の救助活動時に情報が的確で迅速に対処でき被害が少なかったことや、集中化されていない個別のライフラインが、かえって機能マヒがなかったり復旧が早かったなどの報告・指摘がありました。

年次総会の後、午後6時から同ホテルの会場で、懇親会が催された。ブロック会員のほか、造園建設業協会をはじめとする後援団体の方々や、佐賀県内の都市デザインやグラフィックデザインにかかる専門家など、30名余りの参加があった。なごやかな歓談の中、佐賀における質の高い環境デザインの実践等が話題となった。その後、会場を移し、まちづくりに関心が深いオーナー夫婦を交えて活発かつ楽しい議論がおこなわれた。

◆見学会の実施

翌21日（日）の午前中は3時間半の行程で、佐賀市南部、有明海、および市内主要プロジェクトの見学会を実施した。雨天であったが、31名の参加者があった。チャーターした市営バスに同乗し、佐賀駅前を午前9時半に出発、途中車中から城濠や県庁周りを見、典型的な環濠集落のひとつである本庄町中島で下車、集落やホリの現状を見学した。11時前には東与賀町の千鶴公園に着、広大な有明海の千鶴を展望し、この地方特有の民家である「漏斗造り」を復元した休憩所を見学した。その後、市内にもどり、都心繁華街における水辺整備の成功例のひとつである松原川沿いを徒歩で見学し、昼食の会場である料亭に12時に到着した。そこで有明海の郷土料理を食べた後、シンポジウムの会場アバンセがあり、佐賀県・市による大規模開発である大和紡跡地にバスで向かい、午後

< 報告者 >
金澤 成保
SHIGEMORI KANAZAWA
佐賀大学



公開シンポの様子

1時見学会を終了した。

◆公開シンポジウムの開催

同21日の午後2時から、アバンセ（佐賀県立女性・生涯学習センター）第2研修室で、「佐賀の風土と環境デザイン」と題して、一般の参加者も交えてシンポジウムを開催した。参加者は70名余りであった。まず、郷土史家の福岡博氏による「佐賀の風土」に関する基調講演がおこなわれ、それに続いて県・市によるプロジェクトの事例報告がおこなわれた。佐賀市都市計画課の柳川和政氏が「物語性と市民参加」を軸に松原川整備事業の背景と経過を説明した後、佐賀県佐賀空港課の唯野邦男氏が、「機能性と風土性」をテーマに平成10年開港予定の佐賀空港ターミナルビルのデザインについて報告した。最後に、佐賀市土地改良課の久富義人氏が、「都市開発と水辺デザイン」と題して、大和紡跡地の開発と水辺の景観整備について報告した。

これら主要プロジェクトの報告に引き続き、本会議および関連団体の会員代表による討論がおこなわれた。討論のメンバーには、佐賀県建築士会の成松真行氏、佐賀県造園建設業協会の木下博行氏、本会議からは代表幹事の加藤源氏、次回開催地大分県会員の山内英生氏、および佐賀県会員の

金澤成保が、コーディネーターには、ブロック幹事の岡道也があたった。

このシンポジウムでは、「佐賀らしさ」を念頭に新たな都市環境づくりの可能性が探られ、歴史的な遺産や優れた自然環境の保全にとどまらず、身近な生活環境のイメージやエレメントを継承していく「記憶の継続性」の重要性が指摘された。加えて、地域の風土性を現代の感性で読み変えていく、より発展的な取り組みも事例報告の中で示され、「過去」と「未来」の双方を見据えた「佐賀らしさ」の追求の必要性が明らかになったといえる。それには、地域に継承されてきた環境の特色のみならず人々のイメージや伝説を掘り起こし、それらを活用すること、デザインプロセスや維持管理活動に市民の積極的な参加を得ることが、有効であるとの意見は示唆に富むものといえよう。また、低平地佐賀の風土を水をキーワードとして解き、さまざまな角度から水の意味や活用方法を探るべきとの提案もあった。会場からの討論参加もあり、活発な意見交換もある中、「風土を多面的に見つめ直し、地域の個性を発見していく、前向きな運動論を構築しよう」との総括で締めくくり予定の3時間を30分ほどオーバーして、午後5時半成功裏に閉会した。

私の本棚

近田 玲子
REIKO CHIKADA
代表幹事
(株)近田玲子デザイン事務所



ワイルド・スワン
ユン・チアン著、土屋京子訳、講談社

ここ数年の中国の経済発展は目を見張るものがある。私達の事務所では現在、北京にひとつプロジェクトを進行中だが、JUDIの仲間の中にも上海を始めとする中国各地で仕事をする人も沢山いるのを耳にする。

私たち日本人は中国に多くの事を学んだ歴史がある。しかし、近代から現代にかけ中国の人々はどういう体験をし、何を考えているのかを理解する資料が少なかった。そこで勧めたいのがこの本である。

私たちが生きた時代、私たちが新聞やテレビで知っている（つもりだった）、文化大革命以後から現代まで、ついこの間の出来事についての生身の中国が描かれている。

作者のユン・チアンは1952年中華人民共和国四川省に生まれる。両親が共産党の幹部であったことから、特殊階級の豊かな家庭環境で育つ。文化大革命で両親が失脚、毛沢東を名指しで批判した父親は過酷な取り調べの後、精神に異常を来たし長い鬱病生活を送ることになる。14歳で紅衛兵、その後農民、医者、機械工場の鋳造工、電気工を経て、四川大学英文科に入学。1978年イギリスへ留学して言語学の博士号を取得、現在はロンドン大学の東洋アフリカ研究所で教鞭をとっている。

表紙の帯には『「大地」をしのぐ圧倒的なスケール。われわれの隣にかくもすさまじい歴史を生きた人々がいる。こんなにも悲しく、そしてすばらしいノンフィクションが現代にあった。人生において、あと何度こんな作品にめぐりあえるだろ

う。』、『誰かに伝えたい息のつまる思い。今世紀中国のあまりにもすさまじい歴史と、中国文学の力を凝縮した天才的才能との出会い。壯絶な事実に世界は言葉を失う。中国の大地で人々は翻弄されながらも、何と力強く生きてきたのか。』とある。

1933年～1945年の日本占領下の暮らし、共産党と国民党が凌ぎを削った時代。毛沢東による中国共産党支配と恐怖の文化大革命。1975年父親が死んだ。この時代になってすら、党の悼辞の内容が子供たちの将来を左右しつづけることに私は驚いた。1976年、毛沢東の死によって作者はようやく自由になれる事を予感する。1977年トウ小平復権と経済開放政策。1989年の天安門事件について作者は多くを語っていない。それまでの鋭い批判が影をひそめ、「今」については事実を書けない雰囲気がうかがい知れる。

闇をひらく光—19世紀における照明の歴史
ヴォルフガング・シヴェルブッシュ著、小川さくえ訳、法政大学出版局刊

照明に関する本をと言われたら、私は迷わずこの1冊を選ぶ。訳者あとがきの引用でこの素晴らしい本の紹介に代えさせてもらう。

副題に「19世紀における照明の歴史」とあるように、本書は19世紀の産業革命を一つの頂点に、およそバロック時代から近代にいたるまでの照明技術の歴史を広範な文化史の観点から描きだしたものである。（中略）

本書の原題Lichtblickeは、辞書では「希望の光」「光明」などの訳語をあてるのが普通だが、本来

は雲間から射す陽光のことである。したがってこの言葉は、光が待ち望まれる前提として、まず暗雲の闇がすでに存在していることを言外に含めた言い方である。事実、著者が照明技術の歴史を通り一遍の明るい進歩主義で描いているのではないことは、本書を一読すればおわかりいただけよう。シヴェルブッシュは、本書を人工照明の技術発展史から説きおこしているが、とくに「街路」の章では、近代技術に支えられた産業革命と平行して勃発した政治上の革命をめぐって、「希望の光」の裏に暗黒の部分をひそませた社会の矛盾を、当時の近代技術の象徴ともいべき街灯が投げかける文字どおりの明暗に照応させつつ、思いがけぬ側面からみごとに描きだしている。（中略）

シヴェルブッシュは、夢と希望を人類にもたらした照明技術の歴史を描きだすだけにとどまらず、（パシュラールの）「管理された光」にまつわる問題を、心理学はもとより、社会学や経済学を動員し、科学技術史、政治史、文明史、芸術史など

あらゆる分野にわたってダイナミックに論じている。（中略）

平明な文章で書かれた本書には堅苦しさがなく、なによりもまた楽しい読み物になっている。読者は、闇のなかで著者のカンテラが次々に照らし出してくれる興味深い風景を気楽に楽しみながら、いつのまにか光と闇の交錯するヨーロッパの歴史の生きた現場に立ちあうことができる。今日、螢光灯の光が部屋の片隅にまであふれていることになんの疑問ももたぬわれわれの眼には、ヨーロッパの都市がいまだ薄暗い電球や蠟燭の光に愛着を捨て切れないでいるとしか思えないように映ることがあるが、シヴェルブッシュは、これらの人工照明がヨーロッパのさまざまな歴史を照らしだしてきた貴重な生証人だったことをあらためて教えてくれる。闇を見定めながらも、闇を啓くという文字どおりの意味で、本書は最良の啓蒙書といえよう。（後略）

■事務局より

1. 新会員の紹介

1995年5月1日～6月30日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

6/30現在の会員数は、461名です。

氏名	勤務先
齊藤 浩二	(株)タバ・ランドスケープ・プランニング
武田 好正	愛知県土木部道路建設課
下田 明宏	(株)ディーエム
津田 信次	(株)INAX
辻井 順	㈲ホルス計画室
濱田 基三郎	(株)首都圏総合計画研究所
後藤 元一	札幌市立高等専門学校
田中 一雄	(株)GK設計
上山 寛	上山アトリエ
駒谷 康文	駒谷造園(株)
永松 明子	(株)INAX

1995年度会員名簿ができました。誤りの無いよう努めましたが、訂正や変更がある場合には、事務局までご連絡ください。

2. 事務局移転のお知らせ

8月28日から下記に移転することになりました。

新住所：〒113 東京都文京区本郷3-16-5

興医会ビル内

TEL 03-3812-6664

FAX 03-3812-6828

■編集後記

まず発行が予定より遅れることをお詫びしなくてはなりません。本来は7月20日号のはずでしたが、7月15日の本年度の総会報告を掲載することが半分と、あとは編集担当（私）が不慣れのため、遅れてしまいました。というわけで、今や静岡も夏まっさかり・・・です。

特集は、少々個人的な動機から組ませて頂きました。從来から静岡における環境デザインと、都市環境デザイン会議の環境デザインと、ずれる部分があるという気がしていた訳ですが、ただ意外に都市環境デザイン会議の関心の“領域”が広いかもしないという感じもあって、そのあたりを確かめたいということが先ずありました。

また日頃、静岡での環境デザインの現場の課題として、常々登場する“地域性”についても、どのように捉えたら良いか、ということがあり、この点についても、是非議論があって欲しいとおもっています。

今回は、問題の投げかけというところですが、それぞれの地域で活躍する会員の中にも、同様の

ことを考えている方が少なくないと思いますので、今後議論を深めていければと思っています。

原稿執筆者の方々には、若干不明瞭な依頼にも係わらず、十分なご協力を頂きまして有り難うございました。

〔伊藤 光造〕

第5期定期総会に参加して、各ブロックの活動報告を興味深く拝聴した。これまで会員相互の交流・親睦が中心だったが、第5期は都市環境デザインへの理解を深める対社会的な活動を活発化しようという基本方針には共感を覚える。その一助に、今号では都市デザイン、環境デザインと地域性についての特集を組んだ。それにも原稿を依頼するというのがこんなに大変だとは思わなかった。〔松村 みち子〕

広報・出版委員会 土田 旭

伊藤 光造	沢木 俊尚
折田 知子	清水 康博
小林 郁雄	菅 季能
作山 康	中島 猛夫
桜井 淳	松村 みち子
	宮前 保子